舊典類纂

皇位繼承篇

卷三
卷四

二

7 6
6266
2

帝室圖書之章
木五味均平藏
校閲
編纂

皇子

皇子ノ直ニ皇位ヲ繼承スルハ先ッ皇太子ニ立チテ而シテ後寶位ニ即ク是ヲ常典ト為ス、皇太子ニ立タズシテ皇位ヲ繼承スルハ恒典ニ非ズ必ズ事故アルニ緣ル、次下ニ擧ル所ノ書ヲ見テ以テ其ノ概略ヲ知ルベシ○中世已後天皇ノ皇子ニ宣シテ更ニ親王ト稱セシム、宣無キ者ハ皇子ト雖ドモ親王ト稱スルコト能ハズ、此ノ條ヤ皇子ト記シテ其ノ親王ト稱スル者トヲ兼ヌ、立親王ノ事ハセザル者トヲ兼ヌ、立親王ノ事ハ宜シク親王ノ條ト合親スベシ

仁德天皇　允恭天皇　安康天皇　雄略天皇
顯宗天皇　宣化天皇　欽明天皇　崇峻天皇
孝德天皇　光孝天皇　後白河天皇　後嵯峨天皇
光明天皇　後光嚴天皇　後圓融天皇　稱光天皇
後土御門天皇　後柏原天皇　後奈良天皇　正親町天皇
後西院天皇　靈元天皇　今上

○仁德天皇

仁德天皇紀首條　大鷦鷯（オホサヾキ）天皇○仁德天皇ヲイフ譽田（ホムダ）天皇○應神天皇ヲイフ之第四子也云云四十一年○應神天皇ノ年ナリ一年○應神天皇ヲイフ春二月譽田天皇崩時太子菟道稚郎子（ウヂノワキイラツコ）讓位于大鷦鷯尊未即帝位仍諮大鷦鷯尊夫君天下以治萬民者蓋之如天容之如地上有雖心以使百姓百姓欣然天下安矣今我也弟之且文獻不足何敢繼嗣位登天業乎大王○仁德天皇ヲイフ者風姿岐嶷仁孝遠聆以齒且長足為天下之君其先帝立我為太子豈有能才乎唯愛之者也亦奉宗廟社稷重事也僕之不佞不足以稱夫昆上而季下聖君而愚臣古今之常典焉願王勿疑須即帝位我則為臣之助耳大鷦鷯尊對言先皇○先代ノ天皇ヲイフ謂皇位者一日之不可空故預選明德立王為貳祚之以嗣授之以民崇其寵章令聞於國我雖不賢豈棄先帝○應神天皇ヲイフ之命輒從弟王之願乎固辭不承各相讓云云太子○菟道稚郎子ヲイフ曰我知不可奪兄王之志豈久生之煩天下乎乃自死焉云

元年春正月己卯大鷦鷯尊即天皇位

○允恭天皇

允恭天皇紀首條　雄朝津間稚子（ヲアサツマワクゴ）宿禰（スクネ）天皇○允恭天皇ヲイフ瑞齒別（ミヅハワケ）天皇○反正天皇ヲイフ同母弟也云云五年春正月瑞齒別天皇崩愛群卿議之曰方今大鷦鷯（オホサヾキ）天皇之子雄朝津間稚子宿禰皇子與大草（オホクサ）

香皇子、然雄朝津間稚子宿禰、皇子長之仁孝、即選吉日跪上天皇之璽、雄朝津間稚子宿禰、皇子謝曰我不天久離篤疾不能歩行、且我既欲除病云云雄朝津間稚子宿禰、皇子曰奉宗廟社稷重事也、寡人篤疾不足以稱、猶辞而不聽云云元年冬十有二月云云皇子〇允恭天皇ヲイフ曰群卿共為天下請寡人寡人何敢遂辞乃即帝位

〇安康天皇

安康天皇紀首條　四十二年〇允恭天皇ノ四十二年ナリ春正月天皇〇允恭天皇ナリ崩、冬十月癸禮畢之、是時太子〇安康天皇子ナリ暴虐滛于婦女、國人謗之群臣不從悉隷穴穂皇子〇安康天皇ヲイフ爰太子欲襲穴穂皇子而密設兵、穴穂皇子復興兵将戦云云時太子知群臣不從百姓乖違、乃出之匿物部大前宿禰之家、穴穂皇子聞則圍之云云由是太子自死于大前宿禰之家云流伊豫国十二月壬午穴穂皇子即天皇位

〇雄略天皇

雄略天皇紀首條　大泊瀬幼武天皇〇雄畧天皇ヲイフ雄朝津間稚子宿禰天皇〇允恭天皇ヲイフ第五子也云云三年八月穴穂天皇〇安康天皇ヲイフ意将沐浴幸于山宮、遂登樓兮遊目因命酒兮肆宴、爾乃情盤樂極、閒以言談願謂皇后曰吾妹称妻為妹古之俗乎蓋汝雖親昵朕畏眉輪王、眉輪王幼年遊戯樓下悉聞所談、既而穴穂天皇枕皇后膝晝酔眠臥、於是眉輪王伺其熟睡而刺弑之、是日大舎人驟言於天皇〇雄略天ヲイフ曰穴穂天皇為眉輪王見弑、天皇大驚即猜兄等被甲帯刀率兵云坂合黒彦皇子深恐所疑竊語眉輪王、遂共得問而出逃入圓大臣宅天皇使使乞之、大臣以使報曰蓋聞人臣有事逃入王室未見君王隠匿臣舎、方今坂合黒彦皇子與眉輪王深恃臣心来臣之舎誰忍送歟、由是天皇復益興兵圍大臣宅

云云縱火潛宅、於是大臣與黒彦皇子眉輪王俱被燔死云云十一月甲子天皇命有司設壇於泊瀬朝倉即天皇位

○顯宗天皇

顯宗天皇紀首條　弘計天皇更名來目稚子○大兄去来穗別天皇○履仲天皇ヲイフ孫也市邊押磐皇子子也云云穴穗天皇○安康天皇ヲイフ三年十月天皇父市邊押磐皇子及賬内佐伯部仲子於蚊屋野為大泊瀬天皇○雄略天皇ヲイフ見殺因埋同穴於是天皇與億計王聞父見射恐懼皆逃亡云云白髮天皇○清寧天皇ヲイフ二年冬十一月云云白髮天皇崩無子也可以為嗣與大臣大連定策禁中仍使播磨國司来目部小楯持節将左右舍人至赤石奉迎白髮天皇三年春正月天皇隨億計王到摂津國使臣連持節以王青蓋車迎入宮中夏四月立億計王為皇太子立天皇為皇子五年○清寧天皇ノ五年ナリ春正月白髮天皇崩是月皇太子億計王與天皇讓位久而不處云元年春正月己巳朔大臣大連等奏言皇太子億計聖德明茂奉讓天下陛下正統當奉鴻緒為郊廟主承續祖無窮之烈上當天心下厭民望而不肯踐祚遂令金銀蕃國群僚遠近莫不失望天命有屬皇太子推讓聖德彌盛福祚孔章在孺而勤謙恭慈順宜奉兄命承統大業制曰可乃召公卿百僚於近飛鳥八釣宮即天皇位

○宣化天皇

宣化天皇紀首條　武小廣國押盾天皇○宣化天皇ヲイフ男大迹天皇○繼體天皇ヲイフ第二子也云云二年○安閑天皇ノ二年ナリ十二月勾大兄廣國押武金日天皇○安閑天皇ヲイフ崩無嗣群臣奏上劔鏡於武小廣國押盾尊使即天皇之位焉

○欽明天皇

欽明天皇紀 首條 天國排開廣庭天皇○欽明天皇ヲイフ 男大迹天皇○繼體天皇ヲイフ 嫡子也 云 四年○宣化天皇冬十月武小廣國押盾天皇○宣化天皇ヲイフ 崩、皇子天國排開廣庭天皇令群臣曰余幼年淺識未閑政事山田皇后○山田皇后ハ仁賢天皇ノ皇女ニシテ安閑天皇ノ皇后ナリ 明閑百揆請就而決、山田皇后怖謝曰妾蒙恩寵山海誰同萬機之難婦女安預、今皇子○欽明天皇ヲイフ 者敬老慈少禮下賢者日中不食以待士、加以幼而穎脱早擅嘉聲性是寛和務存矜宥、請諸臣等早令臨登位光臨天下、冬十二月甲申天國排開廣庭皇子即天皇位

○崇峻天皇

崇峻天皇紀 首條 泊瀬部天皇○崇峻天皇ヲイフ 第十二子也 云 二年○用明天皇ヲイフ 崩、五月物部大連○守屋大連ナリ 軍衆三度驚駭、大連元欲去餘皇子等而立穴穂部皇子、是日夜半佐伯連丹經手等圍穴穂部皇子宮、於是衛士先登樓上擊穴穂部皇子肩、皇子落於樓下走入偏室衛士等舉燭而誅、辛亥誅宅部皇子○宅部皇子ハ檜隈天皇之子上女王之父也未詳善穴穂部皇子 云 秋七月蘇我馬子宿禰大臣勸諸皇子與群臣謀滅物部守屋、大連、泊瀬部皇子竹田皇子厩戸皇子 云 率軍旅進討大連 云 大連親率子弟與奴軍築稻城而戰、於是大連昇衣摺朴枝閉臨射如雨 云 爰有迹見首赤檮射墮大連於枝下而誅大連并其子等、由是大連之軍忽然自敗 云 八月甲辰次屋姫尊與群臣勸進天皇即天皇之位

於今望因遊獵而謀替立、密使人於穴穂部皇子曰願與皇子將馳獵於淡路謀泄、六月庚戌蘇我馬子宿禰等奉次屋姫尊○次屋姫尊後ニ大統ヲ繼グ推古天皇即ヲレナリ 詔佐伯連丹經手土師連磐村的臣真跨曰汝等嚴兵速往誅穴穂部皇子與宅部皇子、是日夜半佐伯連丹經手等圍穴穂部皇子宮、於是衛士先登樓上擊穴穂部皇子肩、皇子落於樓下走入偏室衛士等舉燭而誅、辛亥誅宅部皇子○宅部皇子ハ檜隈天皇之子上女王之父也未詳善穴穂部皇子 云 秋七月蘇我馬子宿禰大臣勸諸皇子與群臣謀滅物部守屋、大連、泊瀬部皇子竹田皇子厩戸皇子 云 率軍旅進討大連 云 大連親率子弟與奴軍築稻城而戰、於是大連昇衣摺朴枝閉臨射如雨 云 爰有迹見首赤檮射墮大連於枝下而誅大連并其子等、由是大連之軍忽然自敗 云 八月甲辰次屋姫尊與群臣勸進天皇即天皇之位

○孝德天皇

孝德天皇紀（首條）　天萬豐日天皇（○孝德天皇ヲイフ）　同母弟也（云云）　中大兄退語於中臣鎌子連（云云）　中臣鎌子連議曰古人大兄殿下之兄也輕皇子殿下之舅也方今古人大兄在而殿下陟天皇位便違人弟恭遜之心且立舅以答民望不亦可乎於是中大兄深嘉厥議密以奏聞天豐財重日足姬天皇思欲傳位於中大兄（○天智天皇ヲイフ）而詔曰成天豐財重日足姬天皇授璽綬禪位（○孝德天皇ヲイフ）策曰咨爾輕皇子（○孝德天皇ヲイフ）再三固辭轉讓於古人大兄（名更古人大市皇子○古人大兄皇子ハ舒明天皇ノ庶兄ナリ）曰大兄命是昔天皇所生而又年長以斯二理可居天位（於是古人大兄避座逡巡拱手辭曰奉順天皇（○皇極天皇ヲイフ）聖旨何勞推讓於臣臣願出家入于吉野勤修佛道奉祐天皇（辭訖解所佩刀投擲於地亦命帳內皆令解刀即日詣於法興寺佛殿與塔間剔除鬚髮被著袈裟由是輕皇子不得固辭升壇即祚

○光孝天皇

陽成天皇紀　元慶八年二月四日先是天皇手書呈送太政大臣曰朕近身病數發動多疲頓社稷事重神器叵守所願速遜此位焉宸筆再呈旨在難行是日天皇出自綾綺殿遷幸二條院（云云）二品行兵部卿本康親王右大臣從二位兼行左近衛大將源朝臣多（云云）扈從文武百官共奉加常但少納言不奏鈴之狀諸衛不撤警蹕神璽寶鏡等依例相從驛鈴符內印管鑰等留置承明門內東廊（云云）會文武百官於院南門詔曰云云（○天皇位トヲ告ル文アリ省ク）　又皇位（波一日）　不可曠一品行式部卿親王（波諸）親王中（尓）貫首（尓毛）御坐（又前代尓無太子時波如此）老德乎立奉之例在（必以）御齡（母長給比）御心（母正直）久慈厚久慎深御坐天

四朝ニ仕ヘ給ヒ天政道ヲ母熟ナレ給ヘル百官人天下公民ニ未タ詔歌ノ如ニ
仮威無ク異望ニ故是以天皇璽綬ヲ奉リ天日繼ノ位ニ定メ奉ル良久親王
等王等臣等百官人天下公民衆聞給ヒ宣ヒ中納言在原朝臣行部ノ正宣ヒ、中納言在原朝臣行
平於庭詔ヒ百辟群寮並立侍事畢王公已下拝舞而退、於是以
神璽寶鏡等付於王公、即日親王公卿歩行奉天子神璽寶鏡等
今皇帝○光孝天皇ヲイフ於東二條宮

○後白河天皇

百錬鈔　後白河天皇諱雅仁云　鳥羽院第四皇子云　大治二
年丁未九月十一日誕生、同十一月十四日為親王、久壽二年七
月廿四日踐祚年廿九

保元物語巻一　久壽二年秋夏の頃より、近衛院御ますま
すしづみ、七月下旬ほいなやたのみをかけさせ給ひしかども、
験なき鹿の同ようつしまふ云つひに七月廿三日かくれさ
せ給ひ、御年十七、近衛院号をはひ給ふ、
法皇○鳥羽天皇ヲイフ女院○美福門院ヲイフ此御門ありがたくわたらせ給ふ
り、新院○崇徳天皇ヲイフ此時を定ふこそつたなけれ
とも、重仁親王八ツ宮ニ定今ゝ交ハ位ニつかせんと待うけさせ
給ひしまゝ、天下諸人もこゝろひとつに義朝の院に御をもひ
とゝ申こめられをおもせ給ひしを、帝位ニつけまゐらせ
こそ、たのもしいやしかるべきも思ひおのゝまゐらせ
ひりけり

○後嵯峨天皇

皇胤紹運録　後嵯峨院諱邦仁云　仁治三年正月廿日踐祚
廿三　同日元服○天皇立親王ノ儀ナシ

増鏡巻二みの山　む月○仁治三年正月ナリ

皇ヲイフ例なき事ゝ云ゝ九日に曉ことなれさせ給ひ

とそ、許しをたまへる、いとあさましう
云云いまゞで御つぎもおはしまさゞりつる、又御そうし
などもうせられぬべき、世の中にてのまゐりゆのんぞうし
うたどりあへるさまなり、さてもやはとそあやまつべ
つけやりける、將軍〇頼經ヲイフ　大殿（オホトノ）は大納言殿と
きこゆ、御うしろみ承久よのぎりそうし　泰時朝臣なり
云云京よりはをしへ馬をいとはやくつかはし、さ里とそ申べ
ぐら使めしよせてきくまいとをかしうあるべきやうを
あらぬさまにむしろよりやがて君のおはしますとのを
社まうでゝをそとりける、そのふみ云云承久門院もをはや
るどもなひきぐいひしろふ云云承久門院もをはや
さまぐ御祈しるし、あづまより使をやこせつるよし、
ける日、云云故通宗宰相中將御子をまうけ給へり

定通のおやどをのりぞ、何となく御のぼりうちもやと思
ひて、まへなる烏帽子を垂衣すがたにてまいでゝ對面しるしふみ、我景はきやうに
侍りける、阿波院〇土御門天皇ヲイフ　の御子〇後嵯峨天皇ヲイフ　御位をゆづ
りていで給、院の中社人ゝ上下參のこゝちしてものまぞあり
まどひける、仁治三年正月十九日社ありけり、世社人のこゝち
ども驚きあまりて御遊こゝちなくまゐりつどふ、馬車の
音さわぐ世の御とをひを、四辻殿はあさましう中〳〵
その御ぞ〳〵まゐるべし、又社日やがて御元服せさせ給ふ、理髪陸奥守定嗣つかう
ひきいれよ左大臣さぶらはるまつりけり、御いとゞ郎仁、御とし廿三、その夜やがて冷泉
万里小路殿へうつしたてまつりて、院殿より殊更なる儀式いとめでたく
さる、践祚の儀式いとめでたく

○光明天皇

皇胤紹運録　光明天皇諱豊仁（ユタヒト）為光厳院御猶子元亨二年二月十三日立親王建武三年八月十五日践祚、先（ツ）於大納言良基卿亭摸（ニ）仁治例（ニ）被行次第事其儀併（ニ）被摸（ニ）寿永例（ニ）云々

太平記巻十六（北條家本　西源院本）持明院殿ノ君主法皇○花園天皇ヲイフ上皇○光厳天皇ヲイフ親王○豊仁親王ヲイフ洞院大納言公泰卿勅使ニテ山門ニ同（シク）臨幸成奉ルベキ由申サレケレバ○後醍醐天皇足利尊氏ノ兵ヲ避ケテ延暦寺ニ幸ズルトキ、花園法皇光厳上皇及豊仁親王舊ヲモ倶ニ臨幸スベキ由ヲ使者ヲ以テ促サル、ナリ後伏見天皇ヲイフ　ノ御喪籠法事ノ内ナレドモ御遁避有ベキナラネバ既ニ臨幸ナルベキ由申サル、即太田判官全（タケモト）職路次ヲ警固シ奉リテ供奉仕ケリ、然ニ既ニ出御成ケレバ御不豫ノ事有テ暫出御ヲ押ヘラレケリ、後日ニ事ノ心ヲ按ズルニ尊氏卿院宣ヲ故院○後伏見天皇ヲイフ成サレシ事ナレバ御世務ノ事思召放レザリケルニヤ、其上尊氏卿モ内々申入旨ヤ有ケン、去程ニ全職已下軍兵出御ヲ急ギ申ケル間、既ニ上皇○光厳天皇ヲ（ニガ）イフ御輿ニ召レ臨幸ナリケルニ、河原ノ邊ヨリ猶御違例苦々シク成セ給ヒケレバ、姑ク御輿ヲ舁居エ奉リテ御立直シヲ竢奉ル程ニ時刻移リケル處ニ、逆徒等○尊氏ノ兵ヲサス既ニ亂入ス ト見エテ兵火四方ニアガリ閧街衢ニ響ケレバ、全職申ケルハ御違例ヲ推テ儉岨ヲヨコエ奉ランモ行末ノ御煩御不豫御増氣ノ基成ベシ、逆臣既ニ京洛ニ入方々ニ合戦始ルヲ見ナガラ暗然トシテ竢奉ルベキニ非ズ、敵ニ路ヲ推隔ラレナバ悔ルニ益有マジケレバ全職ハ先山門ヘ急馳参ズベシ、面々ハ御違例ノ様ニ依テ急（イソギ）山門ニ成奉ルベシト、供奉ノ人々ニ申置テ全職ハ山ヘ参リケリ、此折節尊氏卿持明院殿ニ御兵士ヲ進ジケレバ未明ニ山門ヘ出御ト仰ケレバ、面々アキレ

テ若臨幸ニヤ參會スルトモ恥辱申ケルガ、聖運ヤ然ラシメケン誤タズ石塔ノ邊ニテ參會シケレバ斜ナラズ喜ビ申、尊氏卿ノ使ト申ケレバ君モ喜ビ思召、供奉ノ人々資名卿重資朝臣等モ各々色ヲ直シケレバ、軈テ武將ノ命トシテ六條長講堂ヲ御所トシテ武家守護シ奉ル、其後京中ノ合戰両方ノ勝負イマダ落居セザルノ間、六月三日三主ノ臨幸ヲ八幡ニ成奉ル、同月十四日ニ八幡ヨリ御歸洛アリテ東寺ニ幸シ灌頂堂ヲ御所ニ構フ、是尊氏卿ノ沙汰ニ依テナリ、是ハ尊氏卿洛中戰場ノ閒東寺ヲ城郭トスル故ナリ、是ニ依テ山門伺候ノ外ノ人々並ニ持明院無貳ノ佞臣ハ各東寺ニ參ジケリ、同年〇建武三年改元シテ六月晦日ヨリ山門ノ合戰ニ利ヲ得ザリシカバ、將軍〇尊氏ヲイフニ馳附勢日々ニ重リ既ニ四海ヲ掌ニセシカバ、同年八月十五日ニ押小路烏丸ニ二條中納言良基

卿ノ宿所ニシテ、後伏見院第二皇子豊仁親王〇光明天ヲ皇位ニ定奉リケリ〇光明天皇ノ践祚ヲイフ

皇年代略記　建武三年五月二十五日後醍醐帝山門行幸欲被伴申光嚴帝處、依御腦不憖御逗留、尊氏申沙汰奉入六條殿六月三日臨幸八幡、同十四日還御六條殿自彼又幸東寺、八月十五日奉伴豊仁親王〇光明天皇ヲイフ幸權大納言良基、押小路烏丸亭有立王事、同二十二日奉伴新帝〇光明天皇ヲイフ還幸東寺

〇後光嚴天皇

皇胤紹運録　後光嚴院諱彌仁（イヤヒト）云云　觀應三年八月十七日踐祚未立親王、自持明院殿渡土御門殿、先於東小御所有御元服事、其後渡御寢殿被行次第事、今度不被行節會不及宣命每事新儀

皇年代略記　後光嚴院諱彌仁云云　曆應元年戊寅三月二日誕

生、觀應三年壬辰八月十七日踐祚十
五今日先ッ立親王當日自持明
院殿渡御土御門殿
椿葉記ニ崇光院ハ光嚴院第一ノ皇子ニテ後嵯峨院葉
室統ヲ傳ヘ給ヒ、御在位ヲヅコノ三年天下ヲ
觀應二年十月七日南朝ノ〇後村上天皇ヨリ元奉ヲ
南征ヲ慶ス、同十二月廿八日太上天皇ノ尊号ヲ辭ラタ、
シカ光明院俄ニ出家アリ法安寺ニ移居ヲ着シ
玉ヒ、長谷寺ノ御菴ニ
玉ヒ居アリ、同三年同二月廿日南朝ノ天氣ヲトリテ
兩上皇〇光嚴天皇光明天皇ヲイフ新院〇崇光天皇ヲイフ儲皇直仁親王八幡ノ軍
陣ニ幸シ給ヒ、南方ノ官軍利ヲクシテ八幡
より没落、河内國東條ノ邊ニ遷幸アリ、同五月ニ
大和國加名生ノ邊ニ遷幸アリ、同八月ニ光嚴院御

落飾ナリ、其後河内ノ如意寺ニテ移居ヲ玉ヒシ
テツヒニハ山國ノ御庵ニ玉ヒ居アリ、カクテコソ崩御
アル、サテ東宮〇直仁親王ヲイフハ嚴
光嚴天皇ヲイフ同八月十七日踐祚
武將〇尊氏ヲイフ改元アリ、シカシテ十行ふ
太平記巻三十二後光嚴院御即位事、今度吉野殿〇後村上天皇ヲイフト將軍〇尊氏ヲイフト御合體ノ議破レテ合戦ニ及シ剣、持明院
ノ本院〇光嚴天皇ヲイフ新院〇崇光天皇ヲイフ主上〇光明天皇ヲイフ春宮〇直仁親王ヲイフ
掘井二品親王マデ皆南方ノ敵ニ囚レサセ給ヒテ、或ハ賀名
生ノ奥或ハ金剛山ノ麓ニ御座アレバ、都ニハ御在位ノ君モ
オハシマサズ、山門ニハ時ノ貫首モ渡ラセ給ハズ、此平安城
ト比叡山ト同時ニ始マリ已ニ六百餘歳、一日モイマダ懸ル
事ヲバ承及バズ、是ヅ末法ノ世ニ成スル驗ヨト淺マシカリ

シ事ドモナリ、サレドモ角テハ如何アルベキトテ天名座主ニハ梶井二品親王ノ御弟子承胤親王ヲ成シ奉ル云云サテ御位ニハ誰ヲカ即ケ進ラスベキト尋求奉ル處ニ、本院第二ノ御子〇後光厳天皇ヲイフ三條内大臣公秀、御女三位殿御局、後ニハ陽禄門院ト申シ御腹ニ生レサセ給ヒタリシガ今年十五ニ成セ給フヲ、日野春宮権大進保光ニ仰テ南方ヘ取奉ラントセラレケルガ、兎角料理ニ滞リテ保光京都ニ捨置奉リケルヲ尋出シ進ラセテ、御位ニハ即進ラセケルナリ

〇後圓融天皇

皇胤紹運錄　後圓融院諱緒仁云云　應安四年三月十五日著袴十四同廿日親王同廿三日元服同日受禪

後深心院関白記　應安四年三月廿一日乙巳、是日天皇〇後光厳天皇ヲイフ遷御藤中納言忠光卿、柳原第、明後日可有讓位之故也云云　裏書云後聞今夜行幸已後有親王宣下事〇後圓融天皇ノ事アリ云云　廿三日丁未陰成剋地震今日天皇讓位也、儲皇〇後圓融天皇ヲイフ先於柳原内裏清涼殿有御元服事云云　事了渡御土御門殿云云　上卿右大臣著陣行警固関事云云　其間大納言被名御前云云　杯酌三巡云云　事了人人參新帝御所無劔璽渡御之儀内侍所渡御云云　節會始云云　事了退出、徘徊便宜所云云　未剋椿葉記　だいり〇後光厳天皇ヲイフ中通ぜられ候る、その頃将軍〇崇光天皇ヲイフ伏見殿〇崇光天皇ヲイフと沖中よりく執事細川武蔵守頼之朝臣天下政事一ハとりさばきほどよく、内裏もくく近き所どもく風雲せつなるうは、伏見殿より栄仁親王〇崇光天皇第一ノ皇子ナリ践祚のち後深草院の次男を日野中納言教光卿を勅使ともくに武家へ仰せ

らる、御事ハ聖断ニ
ハ武家よりさうひやう
治せらるべきまを再三仰
やるゝら内裏より別し
まよりて、所詮いづれ
をやて、つひに一の御子
日立親王、同年同月廿八日元服、應永十九年八月廿九日受禪、
南方紀傳下巻　應永十九壬辰年十一月廿八日ノ朝仁親王御元
服御年云云十二云云　應永廿癸巳年八月廿九日ノ朝仁親王ノ受禪御

皇位繼承篇　巻之三

○皇年代略記後光嚴院云云應安四年三月廿三日讓位於皇子緒仁親王今日先ノ為ニ皇太子トアレド緒仁親王ノ皇太子トナル事ハ誤ナリ〳〵ヘカラス

○稱光天皇

皇胤紹運錄　稱光天皇諱躬仁云云　應永十八年十一月廿五日立親王、同年同月廿八日元服、應永十九年八月廿九日受禪、
南方紀傳下巻　應永十九壬辰年十一月廿八日朝仁親王御元
服御年云云十二云云　應永廿癸巳年八月廿九日朝仁親王ノ受禪御
同書下巻　稱光院人王百二代云云此即位ノ時伏見殿○崇光天
皇ノ皇子榮仁親王ヲイフ、是ヨリ先親王出家アリ、因テ按ズルニ子治仁王ヲシテ皇位ヲ継承セシメント欲スルカ
南帝ノ太子○後龜山天皇ノ子良泰親王ヲイフ
三人ヲ遣シテ御譲國ノ事ヲ諍論セシム、然ドモ武家實仁○稱光天皇ヲイフ
ヲ奉貢シ事ヨリ始ル故ニ御即位ノ勝利ナリ

○後土御門天皇

皇胤紹運錄　後土御門院諱成仁云云　長禄元年十二月十九日立親王、同二年四月十七日御元服　十七寛正五年七月十九日受禪廿三
池ノ藻屑巻九　寛正も五年まぞ有ける云云抑ほかたの
世ハさそ〳〵なとうちつゞき、抑ほやけもさそ〳〵右づくの好き
やうなるふぞ、うく〇後花園天皇ヲイフ

事をのミおぼしめされけるとなん○長禄寛正ノ間畠山政長義就各宗家ヲ相争フ京師騒然タリ、征夷大将軍足利義政意ヲ加ヘズ、後花園天皇コレヲ患ヒ遂ニ皇位ヲ譲ラント欲スルニ至レルナリ

同書巻十　後土御門院百あまり四よあたり給ふ御嗣は

御諱成仁と申し奉り後花園院の一の宮にて　云々　寛正五つとせし七月御位ゆづり給はり侍る、御とし二十まこゝろむくりやあまらせぬへる、いと盛りに匂ひやかの給る御容まで、御心ばへもらうらうじう愛敬つきてなむおはしませバ、上人（ウヘビト）などもいとやう思ひつき奉りて、まづ皇子におはしましゝ時より人ゝのせ奉る人おほくなりしん、殊に二條殿大臣ぞ関白せさせ給ふ○後花園天皇長禄三年四月ヲ以テ成仁ヲ親王トス、成仁親王立太子ノ儀ナシト雖ドモ群臣コレヲ貴重スルコト皇太子ノ如シ、寛正五年七月ニ至テ親王遂ニ皇位ヲ継承ス、按ズルニ長禄寛正ノ間兵乱相踵グ、故ヲ以テ立太子ノ儀ナキカ

○後柏原天皇

皇胤紹運録　後柏原院諱勝仁（カツヒト）云々　文明十二年十二月十三日立親王十七同廿日於前左大臣小河第御元服、明應二年正月六日叙三品、九年十月廿五日踐祚三十七今日被渡劔璽内裏小御所為御所有此儀、日來令住内裏之北對屋給、為踐祚移小御所于時先帝天皇ヲイフ○後土御門崩御于黒戸（クロド）

池の藻屑巻十　内○後土御門天皇ヲイフには宮○勝仁親王ヲイフもねびさせ給へバ譲らせ給はんことを思し召しまで、世の中のさうがはしさまに打たゝせ給ひけるが、次の年の秋、上○後土御門天皇ヲイフものぼそう思しなりて、くすしなどをも御覧じ入るまゐもなくやつれさせ給へぞ、世もいと定めなきを思し召て譲り申えさせ給ひ、さて御心おだやかにおはしまれべう上人（ウヘビト）などを思ひ給へるに、九月には浅ましうならせ給ひぬ、御位給ふ程も内裏さへ定まらず、変かしこく

ゐてわづこのふさふらひき（○後柏原天皇立太子ノ儀ナクシテ直ニ皇位ヲ繼承ス、其ノ故如何ナルヲ知ラズ、按ズルニ後土御門天皇ノ御宇海内大ニ乱レ諸國貢献セズ朝廷ノ衰弊極ル、故ヲ以テ立太子ノ儀ナキカ）

○後奈良天皇

皇胤紹運録　後奈良院諱知仁（ヒト）云

永正九年四月八日立親王（九條尚経公）十七　同廿六日御元服、加冠関白（理髪頭中将實胤朝臣、小御所簾中最密儀也云云）大永六年四月廿九日踐祚、向夜移本殿（○是ノ時ニ當テ天下猶平穏ナラズ朝廷ノ費用支ヘ元服最密儀トアリ以テ推考スベシ）

二水記　大永六年四月廿九日天陰晩頭雨降、今日有踐祚事薄暮参内云々頃之親王（○知仁親王ニシテ即後奈良天皇ナリ）御方渡御也云云先左少将孝顕（衣冠）取御劔云云入御了於議定所（御坐上）被改御直衣云云入御于常御所則劔璽等令拝見御云云、今度別殿儀依無其便先親王渡御儀有之云云、仍劔璽渡御事不及其儀也、先

迫てせられてやすげなく思ふ名殘の世なれば、御はふりのいとまをもえもちてつつましまる人なく、哀なる御事ゝゝ自を誡つゝ思ふおはしましけるも月ぞ泉涌寺ゝゝおはしましける

同書巻十一　百五代後柏原天皇（○後土御門ノ皇子ヲイフ）御諱勝仁と申奉る

先帝（○後土御門ヲイフ）一の宮ゝゝ云明應九年十月廿五日御譲國ありて、御位より即せ給ふ、神璽宝劔渡らせ給へば、小御所ゝゝ云内わたらせおはしまして云云、はえあるべき世なれば、やう〳〵おぼしなりぬるにや、御代ゝゝも國ゝゝ貢物などもとゞこほりしのは、何となく安堵ぞ思ふらんとものこゝろぼそくぞおぼしつゞけさせ給ふ

例如何之由有沙汰、但當時之儀又有何事哉云云
菅別記　大永六年四月廿九日云云　今夜踐祚依武家要脚云
云御議定歟内立廻御屏風為御座、間御裝束者紫宛色御直衣
烏襖（トリダミノ）御指貫（サシヌキ）也云云　白河少將孝顯持御劔近臣祇候之輩皆供
奉云云　次於議定歟有御祝但臣下不知次自議定歟密密入給劔璽、
閉此儀准叡璽被請取之作法云云　新儀餘自由之樣躰、且天道
偏不恐之義也、悉皆律衣入道慈之歟行諸人譜目畢○此ノ條
武家要脚遲遲ニ依テ延引（ノウシ）ト有リ、用度支ヘサリシコト以テ
見ルベシ

○正親町天皇

皇胤紹運録　正親町（オホギマチノ）院諱方仁（シゲヒト）云云　天文二年十二月九日為
親王同廿二日御元服、弘治三年十月廿七日踐祚
沈の藻層巻十二　今年○弘治三年ナリ　又いつぎのことありと
云云をぐて悩べくもあきの世なりとて上下社人さびしう
おもひ思ひうち、内○後奈良天皇ヲイフ
まどをされ給くるあまりや、ありつる野らの名殘御身を
ふつて御そでもそこあをれさせ給ひるが、長月ふ八御ま
しうなうせ給ひて、年内ふ八いとのなうう思ひ入うるも却ほりき、やがて御踐祚なども
五○方仁親王ニテ即位御事ありて御即位
正親町天皇ナリ
いそぎどもをぐり○立太子ノ儀ナキハ費用支ヘザルニ依ルカ
同書巻十三　百七代の帝ハ御諱方仁と申事ふ云云弘治
三年十二月廿七日ふ御年四十二ふて御位のことを給る

○後西院天皇

皇胤紹運録　後西院諱良仁（ナガヒト）云云　正保四年九月十五日為親
王十一云云　慶安四年十一月廿五日於院御所御元服十五加
冠関白近衛尚嗣公　理髪頭右大辨俊廣朝臣云云　承應三年十一月

廿八日踐祚十八
野史卷十二　後西院天皇云云正保四年九月為親王、十一月
徙于高松宮第、更稱桃園宮、又稱花町宮、慶安四年十一月冠云
云承應三年後光明天皇崩無嗣、群臣相議迎天皇奉斂壓、以十
一月二十八日踐祚○先帝後光明天皇俄然トシテ崩ズ、後西院
天皇因テ皇位ヲ繼承ス、故ヲ以テ立太子ノ儀ナキカ、然ルヲ續皇年代略記ニ後西院天皇云寛文三年正月廿六日讓位於皇太弟トアリ、皇太弟トハ靈元天皇ヲサシテイヘレド誤ナリ、當ニ皇弟ニ作ルベシ
子ノ儀ニ及バザルカ

○靈元天皇

皇胤紹運録　靈元院諱識仁云云明曆四年正月廿八日為親
王云云寛文二年十二月十一日於仙洞假殿一條右大臣御元
服九歲加冠関白二條光平公理髮頭右中辨昭房朝臣、同三年正月廿
六日受禪
野史卷十三　靈元天皇云云明曆四年正月為親王云云寛文
二年十二月冠云云三年正月徙于新内裏二十六日受禪○朝延用

帝王御譜　今上天皇御名睦仁ムツヒト孝明天皇第一皇子云云
嘉永五年九月廿二日御降誕、万延元年九月廿八日立親王九
慶應三年正月九日御踐祚十六
皇子ノ皇后ノ勸進ニ從テ皇位ヲ繼承セシ事
欽明天皇　後白河天皇

○欽明天皇

欽明天皇紀首條　天國排開廣庭ノ天皇○欽明天皇ヲイフ男大迹ノ天皇○繼體天皇ヲイフ嫡子也云云天皇愛之常置左右、天皇○欽明天皇ヲイフ如時夢有人云天皇寵愛秦大津父者及壯大必有天下、寐驚遣使普求得自山背國紀伊郡深草里云云四年ノ○宣化天皇四年ナリ冬十月武小

廣國押盾天皇○宣化天皇ヲイフ崩、皇子天國排開廣庭天皇令群臣曰、余幼年淺識、未閑政事、山田皇后○山田皇后ハ仁賢天皇ノ皇女ニシテ安閑天皇ノ皇后ナリ明閑百揆、請就而決、山田皇后怖謝曰、妾蒙恩寵、山海誰同、萬機之難、婦女安預、今皇子○欽明天皇ヲイフ者、敬老慈少、云云、請諸臣等、早令臨登位光臨天下、冬十二月甲申、天國排開廣庭皇子即天皇位、時年若干

保元物語巻一

○後白河天皇

久寿二年の夏の比より、近衛院御なうましましけるが、七月下旬にはやゝたのみすくなき御事なりて、清涼殿の庇の間にうつし奉る云云つひに七月廿三日にかくれさせ給ふ、御年十七、近衛院是なり、むなしき御よはひなり、法皇○鳥羽天皇ヲイフ女院○美福門院ヲイフの御なげきことわりにもすぎて、新院○崇徳天皇ヲイフ此時をえて、わが御身こそ

位にかへりつかせ給はずとも、重仁親王は一定今度は位につかせ給はんと待うけさせおはしましけるに、天下諸人も皆かく存ける処に、思ひの外に美福門院の御はからひとして、後白川院は四の宮とておしこめられておはせしを御位につかせ奉り給ひしかば、たかきもいやしきも思ひのほかに思ひけり、此四の宮も故待賢門院の御はらにて新院の御一腹なれば、女院の御為にはともに御まま子なれども、元ぶかく新院の御心には重仁親王の位につかせ給はんことを猶そねみ奉らせ給ひて、此事を女院とてなし奉らせ給ひて、法皇にしも内々申させ給ひけるなり、去故は近衛院世をはやくうせさせ給ふことは新院呪咀し奉り給ふとおぼしめしける、これによつて新院の御うらみ一しほまさらせ給ふもことわりなり

皇子ノ皇后ト群臣トノ勸進ニ從テ皇位ヲ繼承セシ事

崇峻天皇　後白河天皇

○崇峻天皇

崇峻天皇紀首條　二年○用明天皇ノ二年ナリ夏四月橘豊日天皇○用明天皇ヲイフ崩云云八月癸卯朔甲辰欽屋姫尊○敏達天皇ノ皇后ニシテ即推古天皇ナリ與群臣勸進天皇即天皇之位

○後白河天皇

保元物語巻一　久壽二年の夏ころより近衛院御なやみましくしぐ云つひふ七月廿二日あくれさせ給ふ云云新院○崇徳天皇ヲイフ此時を心うく思召とて位をすてさせ給ひしかども猶世の政をしめさんとて皇仁親王ヲ位につけ奉りて院中にて萬人をまねかせ給ひけるを

思召ける美福門院のおぼしめしけるやうありて、後白河院を四ノ宮にとりたてまつりおはしませばこそかくもありけめ

古事談巻一　近衛院崩御之時後白河院ハ帝位殊外ニ御ケリ、八條院○鳥羽天皇ノ皇女ヲヤ女帝ニスヱタテマツルベキ、又二條院ノ皇子トテ御坐ケルヲヤ可奉付ナド沙汰アリケルニ、法性寺殿○関白忠通ノ仁親王ヲイフ今宮ノ小宮○鳥羽天皇ノ皇子雅仁親王ニテ即後白河天皇ナリ下被奉置、爭后腹ニテ御座スルヲ云云○後白河天皇ノ皇位ヲ繼承セシコトハ、保元物語ト古事談トヲ併考スルニ、美福門院ト法性寺関白忠通可及異儀ト令計申給テ受禪云云因テ此ノ條ニ載スルナリ

皇子ノ群臣ノ勸進ニ從テ皇位ヲ繼承セシ事

允恭天皇　宣化天皇　光孝天皇　後嵯峨天皇

後光厳天皇　後圓融天皇　稱光天皇　後西院天皇

〇允恭天皇

允恭天皇紀首條　五年〇反正天皇ノ五年ナリ春正月瑞齒別天皇〇反正天皇ヲイフ崩、爰群卿議之曰方今大鷦鷯天皇〇仁德天皇ヲイフ之子雄朝津間稚子宿禰皇子〇允恭天皇ヲイフ與大草香皇子、然雄朝津間稚子宿禰皇子長之仁孝、即選吉日跪上天皇之璽、雄朝津間稚子宿禰皇子謝曰云云

元年十有二月云云爰大中姫仰歡則謂群卿曰皇子〇允恭天皇ヲイフ將聽群臣之請今當上天皇璽符、於是群臣大喜即日捧天皇之璽符再拜上焉、皇子曰群卿共為天下請寡人寡人何敢遂辭乃即帝位

〇宣化天皇

宣化天皇紀首條　武小廣國押盾天皇〇宣化天皇ヲイフ男大迹天皇〇繼體天皇ヲイフ第二子也云云二年〇安閑天皇ノ二年ナリ十二月勾大兄廣國押武金日天皇〇安閑天皇ヲイフ崩無嗣、群臣奏上劔鏡於武小廣國押盾尊使即天皇之位焉

〇光孝天皇

光孝天皇紀首條　天皇諱時康仁明天皇第三之皇子也云云元慶八年二月四日太上天皇〇陽成天皇ヲイフ遷御二條院遜皇帝位焉、于時天皇在東二條宮親王公卿奉天子璽綬神鏡寶劔等、天皇再三辭讓曾不肯受、二品行兵部卿本康親王起坐跪奏言歷數攸在謳歌是歸、昔者漢文三讓雖高猶當大橫之緜遂應代邸之迎、伏願陛下在此樂推幸聽於群臣矣、是夜親王公卿侍宿於行在所、五日親王公卿引文武百官奉迎天皇、即日鸞輿入御東宮

愚管鈔巻一　さて清和八十八年保ちて廿六年又さて子

は陽成院の九歳は御年十九にて御讓位ありて、其九にて御
出家ありて二十一にて失給ひけり、陽成院九にて位
につきてハ、八年までの間昔は武烈天皇のごとく不斜
御ましくおそし給しけれバ、をぢにて昭宣公基経ハ
摂政にて諸卿群議ありて、是ハいかでか國王として国をも
治めはしますべきとてあん、おろし奉らせんとて定めりく
ト定ありけるにも、仁明の御孫子にて時康親王○光孝天皇ヲイフと
て式部卿にておはしけるを、迎へとりて位
につけ奉らせられける、是ハ光孝天皇なり

○後嵯峨天皇

百錬鈔 後嵯峨院諱邦仁云々土御門院皇子云々仁治三年正
月廿日踐祚御年廿三今月九日以後空位十二ケ日、被レ待二関東飛脚一
○北條泰時ノ使者ヲイフ之間也、當日於二承明門院一御元服云々諸卿群参

大行皇帝○四條天皇ノ未ダ諡号ヲ奉ラザル間ヲイフ御在所閑院率二三種寶物一被レ参二
新帝○後嵯峨天皇ヲイフ御所一歩行、卿雖二降雨一不レ及二衣濕一仍晴儀也云々

増鏡巻二みかみ山 む月○正月ナリ○仁治三年の五日より内の上○四條天皇ヲイフ
例ならぬ御ことにて云々九日の暁かくれさせ給ぬとてのゝ
しりあへること、あさましともいふばかりなし云々御子なや
うの給はじめもなべてそのすぢにハあらじ、あまりいはけなる
御遊よりそこなはれ給ひけるとぞ、いまだ御つぎもお
はしまさず、又御はらからの宮なども わたらせ給はねバ、
世の中いかになりゆかんずるにかとたどりあへる様なり、
さてしもやハあらむとてあづまへぞつげやりける、将軍○頼経ヲイフ
ハ大殿御子いまは大納言ときこゆ、御うしろみハ武蔵守
泰時朝臣なり云々時房と一所にて小弓
いさせさかもりなどしてむとけるほどなりけるに、京より

をも馬とゐへば何ぞ
よせてきくふいとあさましき
そのむしろよりやごく神事をだ
てくごをそとりくる、そのあど御
どる心のひきくいひしろふ云云ごまの
そやこふ乙るよし少えくる日ハ、両女院○修明門院承明門院ヲイフ承明門院ハ後
嵯峨天皇ノ
御母ナリ
られくるぞ、こととりふぐよいま見ゆべき事なれど
心をあきいさおぞゆるわざぞかし云云日ごらしまた
れて城介義泰とゐをめ三條河原ふうちいでゝ承明
門院の御をくますある院いづくぞと、かた院より立
られくる青侍おいとあやしげるふしもとひられぜ、
きくこちうつともおぞえば、志のくとゆまふ土御門

院、御使○将軍頼経ノ使者ナリ

後へまゐりくれど、門いむぐらつよくこうあとびらもさび
つきもくらねくちてくあくのざりくるを郎等どもおとかく
せさせて、内よまゐりて兄まを世ばまき若ぢむして
松風よりほのくこゝふるものもなく人ぢ通へる跡もなし、
故通宗事お中將の所労をよしぢうし定通ぢ
おとぐだのりぞ、何となくおのづからぢるやと思ひて、
なんばめゝ烏帽子直衣ふてくさらひ給ひくるぞ、中門ふ
いでゝ對面しぢふ義景ハきまの服ふかしこまりてぞ
待りくる、御使○土御門天皇ヲイフ御子○後嵯峨天皇ヲイフ御位ふと
申てぞぬ、院の中ぢ人ぐ上下多ぢこもりて、物ふぞ
あくりやすびける、仁治三年四月十九日ぢまり、世の
人のごちられおどろきあてくおゝ過てくふ
つごふ、馬車ぢひぐきわぐ世ぢおとゐひを、四辻殿ふハ

あさましう中〳〵ことのおぼしまさるべし、又北野やごと
御げんぶくせさせ給ふ云云御ことなる邦仁御年廿三、その
夜やごと冷泉万里小路殿へうつらせ給ひて、開院殿より
劔璽なども渡さる、践祚の儀式いとゑづら〳〵
皇年代略記　後嵯峨院諱邦仁云云仁治三年壬寅正月廿日践
祚於大納言隆親卿冷泉万里小路亭廿四條无繼嗣、為関東沙
汰申行也、同日先、有御元服云云
後光厳天皇
椿葉記　崇光院ハ光厳院第一の皇子おはして後嵯峨院の
末皇統おはしまし、御在位ほどのふ三年、天下こと
なれて観應二年十月七日南朝（後村上天皇ノ御宇ナリ）より元しとて
まうて御位を慶す（崇光天皇ノ御位ヲオロシタルナリ）同十二月廿八日太
上天皇に尊号を奉らる、此日光明院殿ふ御出家あ

皇位継承篇　巻之三

ま、御發心ときこゆ、そのゝち伏見の法安寺おはして禅衣を
着し給ひまして、長谷寺をはじめ御參詣あり、同三年
同二月廿日南朝の元氣ふよりて、両上皇（光厳天皇光明天皇ヲイフ）新
院（崇光天皇ヲイフ）儲王直仁親王八幡を軍陣ふ率し給ひまして
云云さて〳〵東宮（直仁親王ヲイフ）ハ慶せられて、光厳院第二宮（弥仁親王即チ後光厳天皇ナリ）同八月十七日踐祚あまた、又北野御參詣ありおはしまして、武将（尊氏ヲイフ）ぬきのごひとりして申おこなふ
太平記巻三十二　後光厳院御即位事、今度吉野殿（後村上天皇ヲイフ）
ト将軍（尊氏ヲイフ）ト御合體ノ議破レテ合戦ニ及シ剋、持明院
ノ本院（光厳天皇ヲイフ）主上（崇光天皇ヲイフ）春宮（直仁親王ヲイフ）
梶井二品親王マデ、皆南方ノ敵ニ囚レサセ給ヒテ、或ハ賀名
生ノ奥或ハ金剛山ノ麓ニ御坐アレバ、都ニハ御在位ノ君モ
オハシマサズ云云サテ御位ニハ誰ヲカ即ケ進ラスベキト

尋求奉ル處ニ、本院第二ノ御子○後光巖天皇ヲイフ三條内大臣公秀御女三位殿御局、後ニハ陽祿門院ト申シ御腹ニ生レサセ給ヒタリシガ今年十五ニ成セ給フヲヌ、日野春宮權大進保光ニ仰テ南方ヘ取奉ラントセラレケルガ、兒角料理ニ滯リテ保光京都ニ捨置奉リケルヲ尋出シ進ラセテ、御位ニハ即ケ進ラセケルナリ

○後圓融天皇

椿葉記　たゞのり○後光巖天皇ヲイフ伏見殿○崇光天皇ヲイフ御中よく中一通せらるゝ、それころ將軍○義滿ヲイフハ幼少みそ熟事細川武藏守頼之朝臣天下ぜんとはとまさたゝほどふ、ざうみそハ近き臣どもの内談ありて御讓國ありぐ風望せしこのほど、伏見殿より榮仁親王○崇光天皇第一ノ皇子ナリ踐祚ありて、後深草院ゟ來四代みそ傳ふ御理運ぢ次第を、日野中納言教光卿を勅使ゝて武家へ仰せらる、御返事ハ聖斷ゝゝべきよしを申す、承久ゟ武家ゟはゝゝひ申す世ゟなりぬれバ、ゝのみも申さたせらるべきよしを再三仰せらるゝ、御理運ゟ論とそんじ申ぢ所詮ゝゝうひゃまごき事を申て、つひよ一ぢ御子○後圓融天皇ヲイフに御讓位ありぬ、武家ひとまゟ員申ゝへハ力おゝばざる次第なり、さるゟぞよ本院○崇光天皇ヲイフ新院○後光巖天皇ヲイフ近習ぢ人ゟもゝゝぐ中ゟも御位あゝそひハ昔ゟ今ゟ有ることなれバ、ちゝゝなき事歟ゝ

二因ル、故ニ此ノ條ニ載ス

○後圓融天皇ハ御父後光巖天皇ノ讓ヲ受ケ而レドモ其ノ皇位ヲ継承スルハ群臣ノ勸進

○稱光天皇

南方紀傳下卷　稱光院人王百二代云云應永廿四年丁酉云云八月廿九日躬仁親王受禪、即位、即伏見殿○崇光天皇ノ皇子榮仁親王ヲイフ、是ヨリ先皇位ヲ繼承セシメント欲スルカ○親王薙髮アリ、因テ按ズルニ子治仁王ヲ以テ

位ニ即カシムあり、三人おなじく即位ありしかども武家○後小松天皇ノ時ニ及テ其ノ受ル者未ダ定ラズ、群臣ノ勸進ニ從テ皇位遂ニ稱光天皇ニ定ル

家ハ足利義持ナリ實仁皇ヲイフ也○稱光天皇ハ後小松天皇第一ノ皇子ナリ、而シテ立太子ノ儀ナシ、因テ按ズルニ初南北合體ノトキ後龜山天皇ト迭立ノ盟アリ、故ヲ以テ立太子ノ儀ナキカ、天皇位ヲ讓ルノ時ニ及テ其ノ受ル者未ダ定ラズ、群臣ノ勸進ニ從テ皇位遂ニ稱光天皇ニ定ル

○後西院天皇

野史卷十二　後西院天皇、諱良仁後水尾帝第六子也云云正保四年九月為親王云云承應三年九月後光明天皇崩無嗣、群臣相議迎天皇奉敘璽、以十一月廿八日踐祚

皇子ノ皇太子ヲ超テ皇位ヲ繼承セシ事

顯宗天皇　孝德天皇

○顯宗天皇

仁賢天皇紀首條　二年○清寧天皇ノ二年ナリ　夏四月遂立億計、天皇○仁賢天皇ヲイフ　為皇太子事具弘計天皇紀　五年白髮天皇○清寧天皇ヲイフ　崩、以天下讓弘計、天皇○顯宗天皇ヲイフ　為皇太子如故○皇太子皇位ヲ弟顯宗天皇ニ讓リ已仍皇太子タルナリ

○孝德天皇

孝德天皇紀首條　天萬豐日（アメヨロヅトヨヒ）天皇○孝德天皇ヲイフ　天豐財重日足姬（アメトヨタカライカシヒタラシ）天皇○皇極天皇孝德天皇ハ共ニ敏達天皇ノ曾孫ニシテ茅渟王ノ子ナリ　同母弟也○皇極天皇ヲイフ同母弟也○皇極天皇孝德天皇ハ共ニ敏達天皇曾孫ニシテ茅渟王ノ子ナリ

四年○皇極天皇ノ四年ニシテ即六月庚戌天豊財重日足
云孝徳天皇ノ大化元年ナリ
姫天皇思欲傳位於中大兄○天智天皇ヲイフ時而詔曰云云
中大兄退語於中臣鎌子連鎌子連議曰古人大兄殿下之兄也
輕皇子○孝徳天皇ヲイフ殿下之舅也方今古人大兄在而殿下陟天皇
位便違人弟恭遜之心且立舅以荅民望不亦可也於是中大兄
深嘉厥議密以奏聞天豊財重日足姫天皇授璽綬禪位策曰咨
爾輕皇子云云輕皇子再三固辞云由是輕皇子不得固辞升
壇即位

皇子ノ立親王ノ儀ナクシテ直ニ皇太子ト為テ皇
位ヲ繼承セシ事

皇子ヲ以テ更ニ親王ト稱スルハ中世以来ノ制
ナリ、其ノ制ヨリ以前ノ者ハ此ノ條ニ載セズ

聖武天皇　清和天皇　陽成天皇　後鳥羽天皇
土御門天皇　後小松天皇

○聖武天皇

元正天皇紀　神亀元年○養老八年ヲ以テ神亀元年ト為ス二月甲午天皇禪
位於皇太子○聖武天皇ヲイフ
聖武天皇紀　天璽國押開豊櫻彦○聖武天皇ヲイフ天皇之真宗豊
祖父天皇○文武天皇ヲイフ之皇子也云云和銅七年六月立為皇太子
于時年十四二月甲午受禪即位於大極殿
皇年代略記　聖武天皇諱首○首ヲオビトニ云云大寶元年辛丑降誕和銅七年
甲寅六月庚辰加元服立太子十一養老八年甲子二月四日受禪○扶桑略記
巻六元明天皇和銅七年六月廿八日ノ條ニ首皇子ヲ豊櫻彦親王ト記セルハ恐ラクハ推シテ親王ト記セルナラン

○清和天皇

清和天皇紀　首條　天皇諱惟仁○惟仁ヲコレヒトニ文徳天皇之第四子也云云嘉祥
三年歳在庚午三月二十五日生天皇於太政大臣東京一條第

十一月二十五日立為皇太子、于時誕育九月也云云天安二年八月廿七日文徳天皇崩於冷然院親成殿、従五位上守左近衛少将兼行美濃介良岑朝臣清風云云奉天子神璽寶劔節符鈴印等於皇太子直曹

皇年代略記　清和天皇諱惟仁云云嘉祥三年庚午三月廿五日降誕於太政大臣東京小一條第同十一月廿五日立太子当歳天安三年戊寅八月廿七日受禅九歳是日先帝崩

〇陽成天皇

陽成天皇紀首條　天皇諱貞明先是太上天皇〇先太上天皇ハ即清和天皇ナリ之第一子也云云去貞観十年十二月十六日生帝於染殿院、十一年二月二日天皇立為皇太子誕育三月矣、十八年十一月二十九日九歳是日出自染殿院御鳳輦帰東宮、百官供奉如常諸衛警陣相共厳密〇陽成天皇ノ皇位ヲ継承スルヲイフ

皇年代略記　陽成天皇諱貞明云云貞観十年戊子十二月十六日誕生於染殿院十一年二月一日立太子二云云十八年丙申十一月廿九日受禅九

〇後鳥羽天皇

皇年代略記　後鳥羽院諱尊成高倉第三子云云寿永二年癸卯八月廿日壬子踐祚四於閑院、依旧主皇〇安徳天皇ヲイフ赴西海、被下法皇〇後白河天皇ヲイフ詔、先為皇太子神鏡劔璽獨不帰坐

増鏡おどろのした　御門はじまり給ひてより八十二代にあたりて後鳥羽院と申おはしましき、御いみな尊成これは高倉院第四の御子云云かの新帝〇安徳天皇ヲイフ平家の人々にひかされてはるかなる西の海にさすらひ給ひにしかば、後白川法皇の御むまごの宮たちむかへさせすゑて見奉り給ふ時、二の宮〇守貞親王ヲイフを次第給ふに

おとおぼされるふ、法皇○後白河天皇ヲイフ
をまつり帰給ひぬるをまで、なほむづかりとゞめ給ひて、四の宮こゝろよからぬ事ありてのうつほいでこゝろもとむつましからぬ御けしきなれば、これこそ御ことおもはまぼろしおぼしめしなどおぼえ給ひ、いとらうたしとて、寿永二年八月廿日御門○安徳天皇ヲイフ西海へ除奉り給ひしうつゝの夢にたまひつゝ

神皇正統記下巻　第八十代後高倉院御諱守貞

高倉院御子云々　○後白河天皇ヲイフ

祖父法皇○後白河天皇ヲイフ御世なかばにて大臣平氏を滅ぼし給ひ、掌を指すがごとく世をしたがへ給ひしかば、政基遠く及ぶ人なかりき。されば、還幸あるべきよし○宣ノナリ　院宣○後白河天皇ヲイフありけれど平氏承引せず。詔ありて此宮をたてまつり給ひぬ、親王の宣旨までもなく、先皇太子とし、即受禅の儀あり、翌年甲辰改元○元暦トイフ七月ありしかど、世固まる兆なく、三種の神器ありしかど、法皇比叡山をのがれ給ひぬ。

○土御門天皇

よりとゞまりぬ、其の平氏を親族なる四人ぐらゐの御位つゐでまつる人なかりき、還幸あるべきよし○宣ノナリ　院宣○後白河天皇ありけれど平氏承引せず。詔ありて此宮をたてまつり給ひぬ、親王の宣旨までもなく、先皇太子とし、即受禅の儀あり、翌年甲辰改元○元暦トイフ七月ありしかど、世固まる兆なく、三種の神器ありしかど、法皇比叡山をのがれ給ひぬ。

○土御門天皇

皇年代略記　土御門院諱為仁云云建久六年乙卯十二月二日誕生、九年戊午正月十一日受禪四於閑院兼日无立親王立坊、事今日先ノ為皇太子

毘沙門堂所藏記　土御門院建久九年正月十一日受禪云云宣命使云云為仁、王皇太子止定天日嗣乎傳云云

○後小松天皇

皇年代略記　後小松院諱幹仁云云永和三年丁巳六月廿六日誕生、永徳二年四月七日著袴、十一日受禪六今日先ノ立太子不立親王

皇子ノ立親王ノ儀ナクシテ直ニ皇位ヲ繼承セシ事

○後嵯峨天皇

皇年代略記　後嵯峨院諱邦仁云云承久二年庚辰二月廿六日誕生、仁治三年壬寅正月廿日踐祚於大納言隆親卿、冷泉萬里小路、亭、廿三四條○四條天皇ヲイフ无繼嗣為関東沙汰申行也

皇子ノ皇位ヲ繼承スルヲ辞シ而シテ後非常ノ事故有テ皇位ヲ繼承セシ事

○天武天皇

天武天皇紀上首條　天渟中原瀛真人ノ天皇○天皇ヲイフ天智天皇同母弟也幼曰大海人ノ皇子云云納天命開別天皇、女菟野ノ皇女○持統天皇ヲイフ為正妃、天命開別天皇元年立為東宮、四年冬十月庚辰天皇○天智天皇ヲイフ卧病以痛之甚矣、於是遣蘇賀臣安麻侶召東宮引入大殿、時宜好、密頼東宮曰有意而言矣、東宮於茲疑有隠謀而慎之、天皇勅東宮授鴻業、乃辞讓之曰臣之不幸元多病何能保社稷、願陛下舉天下附皇后、○倭姫王、皇后ヲイフ仍立大友皇子宜為儲君、臣今日出家為陛下欲修

功徳、天皇聴之、即日出家法服因以奉私兵器悉納於司、壬午入吉野宮（○天武天皇時ニ皇太弟タリト雖ヘドモ一旦皇位ヲ継承スルコトヲ辞シテ出家ス、後弘文天皇ニ克テ皇位ヲ継承セシニアラザルナリ）

天武天皇紀下　二年春二月癸未天皇命有司設壇場即帝位於飛鳥浄御原宮（アスカノキヨミハラノミヤ）

水鏡中巻　天武天皇云々

つぎ給ふべきにかどうちまかの物ゝ位をなり、世を遁れ給ひしことを天智天皇聞召て御年申給ひぬ、天智七年二月三日うせさせ給ひぬ、同み母大友皇子（○弘文天皇ヲイフ位をつぎ給ふべき年の四月ふなるこの御門（○天武天皇ヲイフ）を疑ひ申て、出家しをよ野宮（○吉野ノ宮ヲイフ）を去給ふ、さて御年卅二にこもらせ給ひて、吉野宮をかこみ給ひぬとはの聞

しを給ふにも、まづ美濃尾張の國ゝ天智天皇御みまゝごをつくらむ料とて人夫を數多おこせつゝ、御の奥を持ゝまゐるべきよし仰ゝさるゝ、さるゝことゝもあらばこそ、こゝ給ふことのおこり侍るべきとつげヤ人あり、又近江の京より大和の京まで所ゝ皆つゞけものを置て守らしめ侍り、駅どや人もありさ、大友皇子御門の門ゝ悉く閉さるゝ、このよしのあるものゝ御門ゝを内ゝ閉ぢ給ふことゝ聞ゆ、吉野宮給ふは位を譲り世を遁る事ハ、病をつゝしひ命を保たんことをこそ思ひつるゝ、思ひざるおこゝ家ゝを失ふべきにこそ、いのちをけてもあるべきとおぼしつゝ、皇子たちを引具しまゐりて、物あら

防ぎ拒ぎしかども、東國北方への路ひしきものゆゑ、縣犬養大伴（トモ）といひしものあひ謀りて馬ふみ破り、出でて來りて門を破りて入ふおそれしかども、國ゝの其數をしらず、かくて六七月のより所ゝみだれ大友王子を戮し、廿一日に大友王子左右大臣あひともふかく橋の西に陣を張りて戰ふ、こゝにこのころ降いくさ雲霞の如くおほく數をしらず、矢ぶくろもすべて雨のごとし、ほどなく皇子方の軍破れて、皇子も大臣もみづから、二十三日ふかく皇子みづからつひに命をうしなひてしかば、廿六日ふぞろひをなして不破の大臣これさへられ左大臣流されあきまの人ゝ罪をかうむる多く作りき、やがて軍ふかをいれる人ゝ

つゝさ位どもを除き、諸門（○天武天皇ヲイフ）ハ皇子ノ叔父おぢおせゝうえよ御志うとふつゝもおもひ淨ゝぞかし、かゝぐ志ごひまつりのつふおぢりぬしことの、佛教もうけ給はりみこそ侍るめれ（○天武天皇ノ皇位ヲ繼承セシ年月日ハ委シク即位ノ條ニ辨ズ）

皇子ノ皇太子ノ暴虐ナルヲ以テ擊テ之ヲ滅シ已コレニ代リテ皇位ヲ繼承セシ事

○安康天皇

安康天皇紀首條　穴穗（アナホ）天皇（○安康天皇ヲイフ）　雄朝津間稚子宿禰（ヲアサヅマワカコスクネ）天皇（○允恭天皇ヲイフ）第二子也、四十二年春正月天皇崩、冬十月瘞禮畢之、是時太子（○木梨輕太子ヲイフ）行暴虐淫于婦女國人謗之群臣不從悉隷穴穗皇子、（○安康天皇ノ皇子ヲイフ）皇子欲襲穴穗皇子而密設兵、穴穗皇子復興兵將戰、故穴穗（アナホ）括箭（ヤ）輕（カル）始起于此時也、時太子知群

臣不從百姓乖違乃出之匿物部大前宿禰之家穴穗皇子聞則圍之大前宿禰出門而迎之云云乃啓皇子曰願勿害太子臣將議由是太子自死于大前宿禰之家（一云流于伊豫國）十二月壬午穴穗皇子即天皇位

皇女ノ皇太子ト為リテ皇位ヲ繼承セシ事

○孝謙天皇

聖武天皇紀　天平十年春正月壬午立阿陪（あべ）内親王（○孝謙天皇ヲイフ）為皇太子

同書　天平感寶元年秋七月甲午皇太子受禪即位於大極殿

水鏡中卷　次おみのど孝德天皇とやき、聖武天皇ときこゆ御女井母ハ多比等（たひと）の御むすめ光明皇后ぞおはしまし、天平勝寶元年七月二日位よつぎたまふ、御年廿一、世をさうこと十年あり、御おとゝ阿陪内親王ぞ

神龜五年ヲ以テ年二歳ヲ踰ヘテ皇位ヲ繼承セシ事

皇女ノ直ニ皇位ヲ繼承スルハ皇子ノ皇太子ニ立チ而シテ後寶位ニ即クノ例ノ如シ、故ニ皇女ノ皇太子ニ立タズシテ皇位ヲ繼承スルハ恒典ニ非ズ、必ズ事故アルニ緣ル

推古天皇　持統天皇　元明天皇　元正天皇

明正天皇　後櫻町天皇

○推古天皇

推古天皇紀　豐御食炊屋姬天皇（○推古天皇ヲイフ）欽明天皇中女也云云當于泊瀨部天皇（○崇峻天皇ヲイフ）五年十一月天皇（○崇峻天皇ヲイフ）為大臣馬子宿禰見殺、嗣位既空、群臣亭中倉（ナカツクラ）

太珠敷天皇○敏達天皇ヲイフ之皇后額田部皇女○推古天皇ヲイフ以將令踐祚、皇后辭讓之、百寮上表勸進至于三乃從之、因以奉天皇璽印、冬十二月巳卯皇后即天皇位於豊浦宮

○持統天皇

持統天皇紀首條　高天原廣野姫天皇○持統天皇ヲイフ少名鷕野讚良皇女天命開別天皇○天智天皇ヲイフ第二女也云天豊財重日足姫天皇○齊明天皇ヲイフ三年適天渟中原瀛真人天皇○天武天皇ヲイフ為妃云朱鳥元年九月丙午天渟中原瀛真人天皇崩、皇后○持統天皇ヲイフ臨朝稱制云四年春正月戊寅朔物部麻呂朝臣樹大盾神祇伯中臣大島朝臣讀天神壽詞畢忌部宿禰色夫知奉上神璽劔鏡於皇后、皇后即天皇位ズ○天武天皇朱鳥元年九月ヲ以テ崩后皇位ヲ繼承ス其ノ故未ダ詳ナラズ、時ニ皇太子草壁アリ、然レドモ皇

元明天皇紀首條　日本根子天津御代豊國成姫天皇○元明天皇ヲイフ小名阿閇皇女天命開別天皇○天智天皇ヲイフ之第四皇女也云適日並知皇子尊生天之真宗豊祖父天皇○文武天皇ヲイフ慶雲三年十一月豊祖父天皇不豫始有禪位之志、天皇謙讓固辭不受、四年六月豊祖父天皇崩、庚寅天皇御東樓詔召八省卿及五衛督率等、告以依遺詔攝萬機之狀、秋七月壬子天皇即位於大極殿文武天皇崩ズ時ニ首上皇子幼ナルヲ以テ皇子カ嚮アリ、然レドモ皇子ヲ元明天皇ニ讓ル扶桑略記卷五　文武天皇云慶雲四年六月十五日天皇春秋廿五崩云遺詔云舉哀三日凶服一月、朕之母儀阿閇皇女宜攝萬機嗣天皇位矣○元明天皇ノ慶雲四年六月十五日ヲ以テ皇位ヲ繼承セシコト、此ノ記ノ文ヲ以テ知ルベシ

○元正天皇

元明天皇紀　靈龜元年○和銅八年ナルヲ改元九月庚辰天

皇禪位于氷高内親王（ヒタカノ）○元正天皇ヲイフ詔曰云云因以此神器欲レ讓二皇太子一○首皇子ニテ即聖武天皇ナリ而年齒幼稚未レ離二深宮一庶務多端一日萬機一品氷高内親王早叶二祥符一夙彰二德音一云云今傳皇帝位於内親王、公卿百寮宜悉祇奉以稱二朕意一焉○元正天皇ハ草壁皇子ナリ而シテ後元二明天皇位一ニ即ク内親王ト称ス、故ヲ以テ此ノ條ニ載ス

元正天皇紀首　日本根子高瑞浄足姫（ヤマトネコタカミヅキヨタラシヒメ）天皇○元正天皇ヲイフ天渟中原瀛真人天皇○天武天皇ヲイフ之孫日並知皇子尊之皇女也云云九月○和銅八年庚辰受レ禪即位于大極殿

○明正天皇

皇胤紹運録　明正院諱興子（オキコ）云云寛永六年十月廿九日為二内親王一七歳同年十一月八日受レ禪○後水尾天皇位ヲ遜レンニト欲ス、時ニ皇子皆已ニ薨ズ、因テ寶位ヲ女一宮興子内親王ニ讓ル

○後櫻町天皇

皇胤紹運録　後櫻町院諱智子（トシコ）云云寛延三年三月廿八日為二内親王一云云寶暦十二年七月廿七日踐祚

野史巻十八　後櫻町天皇云云寛延三年三月為二内親王一云云寶暦十二年七月桃園帝大漸、群臣議以二英仁親王一（ヒデト）○後桃園天皇ヲイフ猶幼稚二因明正帝故事一迎二天皇一、廿一日桃園帝崩、二十七日天皇踐祚

皇統御譜　後櫻町天皇御諱智子云云寛延三年三月廿八日内親王宣下（十一歳）云云寶暦十二年七月廿七日御踐祚、主上桃園院去十二日崩御依レテ御二繼體一、去廿日入二御于内裏一（廿三歳）同日諒闇被二准父帝一

皇女ノ皇后ニ立チ而シテ後皇位ヲ繼承セシ事

推古天皇　持統天皇

○推古天皇

推古天皇紀（首條）豐御食炊屋姬天皇（○推古天皇ヲイフ）天國排開廣庭天皇（○欽明天皇ヲイフ）中女也 橘豐日天皇（○用明天皇ヲイフ）同母妹也 幼曰額田部皇女 云々 年十八歲立為淳中倉太玉敷天皇之后（○敏達天皇ノ皇后ヲイフ）薨 三十四歲淳中倉太珠敷天皇崩 三十九歲當于泊瀨部天皇（○崇峻天皇ヲイフ）五年十一月天皇（○崇峻天皇ヲイフ）為大臣馬子宿禰見殺嗣位既空 群臣請淳中倉太珠敷天皇之皇后額田部皇女以將令踐祚 皇后辭讓之 百寮上表勸進至于三乃從之因以奉天皇璽印 冬十二月巳卯皇后即天皇位於豐浦宮

○持統天皇

持統天皇紀（首條）高天原廣野姬天皇（○持統天皇ヲイフ）少名鸕野讚良皇女 天命開別天皇（○天智天皇ヲイフ）第二女也 云々 天豐財重日足姬天皇（○皇極天皇ヲイフ）三年適天渟中原瀛真人天皇（○天武天皇ノ立為皇后 從始迄今佐天皇（○天武天皇ヲイフ）定天下 每於侍執之際 輒言及政事多所毗補 朱鳥元年九月丙午天淳中原瀛真人天皇崩 皇后臨朝稱制 云々 四年 云々 皇后即天皇位ヲ繼承シテ天皇ト稱セズ仍皇后ノ皇后皇位ヲ繼承シテ天皇ト稱セザリシ事

○皇后鸕野讚良皇女（持統天皇）

持統天皇紀（首條）朱鳥元年九月丙午天淳中原瀛真人天皇（○天武天皇ヲイフ）崩 皇后（○持統天皇ヲイフ）臨朝稱制（○持統天皇即位ノ禮ヲ行フ迄ハ稱制ト）云々 四年 云々 皇后即天皇位 皇年代略記 持統天皇諱菟野（ウノ）又号高天原廣野姬（タカマノヒロノヒメ）又号鸕野讚良（ウノサヌラ）皇女 天智第二女天武后 云々 天武三年甲戌二月為皇后 朱鳥元年丙戌皇后臨朝 天武雖皇子坐 以皇后攝天下 以丁亥為元年

皇女ノ皇位ヲ繼承シテ仍天皇ト稱セザリシ事

鸕野讚良皇女 阿閇皇女

○鸕野讃良皇女持統天皇

持統天皇紀首條　朱鳥元年九月丙午天淳中原瀛眞人天皇○天武天皇崩、皇后○持統天皇ヲイフ臨朝稱制○天皇四年正月二至テ天皇ノ皇女ナリ、但シ三年正月ノ條下ニ、天皇朝萬國ノ位ニ即ク、天皇ハ天智天皇ノ皇女ナリ、但シ慶雲三年云云トアルハ後ノ称ヲ前ニ及ボセルナリ

○阿閇皇女元明天皇

元明天皇紀首條　慶雲三年十一月豊祖父ノ天皇○文武天皇ヲイフ不豫始有禪位之志、天皇○阿閇皇女草謙讓固辭不受、四年六月豐祖父天皇崩、庚寅天皇御東樓詔召八省卿及五衛督率等、告以依遺詔攝萬機之状○天皇是ノ歳七月ニ至テ天皇ノ位ニ即ク、天皇ハ天智天皇ノ皇女ナリ但シ慶雲三年云云トアルハ持統天皇ノ例ニ同ジ

皇女ノ萬機ヲ攝行シ而シテ後皇位ヲ繼承セシ事

○元正天皇

神皇正統記中巻　第四十四代元正天皇ハ草壁太子ノ御女、御母ハ元明天皇ノ姉ナリ、乙卯　靈亀元年

御母ハ元明天皇文武同母ノ姉ナリ、乙卯　靈亀元年二月ヲ按ズルニ、九月ヲ受禪ノ年ニ當ル、故ニ元年ト號ス、其ノ即位ノ日ハ未詳ナリ、

皇女ノ群臣ノ勸進ニ從テ皇位ヲ繼承セシ事

○後櫻町天皇

野史巻十八　後櫻町天皇諱智子（トシコ）櫻町帝第一女也云云寛延三年三月為内親王云云寶暦十二年七月桃園帝大漸、群臣議

○元明天皇紀ニ此ノ事ヲ擧ゲズ靈亀元年正月ノ條ニ天皇ハ元正天皇ノ母ナリ、又同年九月ノ條ニ天皇ハ元明天皇ノ姉ナリト見エタリ、

○元正天皇紀ニ此ノ事ヲ擧ゲズ靈亀元年正月ノ條ニ詔曰、乾道統天、文明於是取曆、大寶曰位、震極乎以居尊、昔者揖讓之君、旁求歷試、干戈之主、繼躰承基、貽厥君臨天下、撫育黎元、蒙上天之保佑、賴祖宗之遺慶、海内晏靜、區夏安寧、然而兢々之志、夙夜不忘、翼々之情、慎一日憂勞、庶政九載于茲、今精華漸衰、耄期斯倦、深求閑逸、高蹈風雲、釋累遺塵、捨同脫屣、因以此神器、欲讓皇太子、而年歯幼稚、未離深宮、庶務多端、一日萬機、一品氷高内親王早叶祥符、夙彰德音、天縱寬仁、沉靜婉嫕、華夏載佇謳訟知歸、今傳皇帝位於内親王、公卿百寮宜悉祇奉以称民意、焉トノミアリテ靈亀元年正月ヨリ九月ニ至テ攝政ノ事ヲ載セズ故ニ神皇正統記ヲ引テ以テ一例ヲ示ス

以英仁親王（ヒデヒト）〇後桃園天皇ヲイフ猶幼稚因明正帝故事決迎天皇（二）二十一日桃園帝崩、二十七日天皇踐祚（二）

皇女ノ皇后ノ群臣ノ勸進ニ從テ皇位ヲ繼承セシ事

皇后ノ皇位ヲ繼承スルハ必ス皇族ノ皇后ナリ

〇推古天皇

推古天皇紀（首條）　五年〇（崇峻天皇十一月天皇〇崇峻天皇ヲイフ）為大臣馬子宿禰見（レ）殺（ス）嗣位既空（シ）、群臣請（二）渟中倉太珠敷（ヌナクラノフトタマシキノ）天皇〇敏達天皇ヲイフ之皇后額田部（ヌカタベノ）皇女〇推古天皇ヲイフ（二）以将（レ）令（レ）踐祚（二）皇后辭讓之、百寮上（レ）表勸進至（二）于三（一）乃從（レ）之、因以奉（二）天皇璽印（一）、十二月己卯皇后即天皇位於豊浦宮（二）

愚管鈔卷一　推古云云崇峻被（レ）弑（レ）てお計を伍よつけまるむまやどのまをもてまつりて世を政を事領、此東宮聖明の沙汰なり

皇位繼承篇巻之三　終

議官　福羽美静　撿閲
少書記官　横山由清
大書記生　黒川眞頼　編纂

諸王

諸王ノ直ニ皇位ヲ繼承セン事

諸王ノ皇位ヲ繼承スルハ恒典ニ非ズ必ズ事故アルニ緣ル、次下ニ擧グル所ノ書ヲ見テ以テ其ノ概略ヲ知ルベシ

繼體天皇　舒明天皇　後堀河天皇　後花園天皇
光格天皇

①繼體天皇（應神天皇彦主人王之子）

繼體天皇紀首條　男大迹（ヲホトノ）天皇更名彦太尊（ヒコフトノミコト）○繼體天皇ヲイフ　譽田（ホムダノ）天皇（○應神天皇）

皇ヲ五世孫彦主人王子也云云八年ノ八年ナリ冬十二月己亥小泊瀬天皇○武烈天皇ヲイフ崩元無男女可絶繼嗣壬子大伴金村大連議曰方今無繼嗣天下何所繫心自古迄今禍由斯起今足仲彦天皇五世孫倭彦王在丹波國桑田郡請試設兵杖夾衛乘輿就而奉迎立爲人主大臣大連等一皆隨焉奉迎如計於是倭彦王遥望迎兵懼然失色仍遁山壑不知所詣

元年春正月辛酉朔甲子大伴金村大連更籌議曰男大迹王○繼體天皇ヲイフ性慈仁孝順可承天緒云云丙寅遣臣連等持節以備法駕奉迎三國夾衛兵杖肅整容儀警蹕前驅奄然而至於是男大迹天皇○繼體天皇ヲイフ晏然自若踞坐胡床齊列陪臣既如帝坐持節使等由是敬憚傾心委命冀盡忠誠然天皇意裏尚疑久而不就適知河内馬飼首荒籠密奉遣使具述大臣大連等所以奉迎本意留二日三夜遂發云云甲申天皇行至樟葉宮二月辛卯朔甲午大伴金村大連等奉上天子鏡劍璽符再拜男大迹天皇謝曰云云大臣大連等皆曰臣伏計之大王○已下普通本錯亂アリ古本ニ據テ文ヲ改ム子民治國最宜稱臣等爲宗廟社稷計不敢忽幸籍衆願乞垂聽納男大迹天皇曰大臣大連將相諸臣咸推寡人寡人敢不奉乃受璽符是日即天皇位

○舒明天皇紀首條　敏達天皇之孫彦人大兄皇子之子

舒明天皇○敏達天皇ヲイフ孫彦人大兄皇子之子也云云豊御食炊屋姬天皇○推古天皇ヲイフ二十九年皇太子豊聰耳尊薨而未立皇太子以三十六年三月天皇崩九月葬禮畢之嗣位未定當是時蘇我蝦夷臣爲大臣獨欲定嗣位云云

元年春正月丙午大臣及羣卿共以天皇之璽印獻於田村皇子○舒明天皇ハ敏達天皇ノ孫ニテ彦人大兄皇子ナレバ皇ヲイフ云云即日即天皇位○

後世ニイフ諸王ニシテ皇位ヲ継承セシ例ナリ

○後堀河天皇（高倉天皇之孫 守貞親王之子）

皇胤紹運録 後堀河院諱茂仁（トヨヒト）云云承久三年七月九日践祚（○父王ハ高倉天皇ノ御子守貞親王ニシテ後高倉天皇ト称スル即チ是ナリ）十依二天下擾乱一為二関東沙汰一有下立王及父王尊號事上

増鏡巻二衣ふぢ その頃いとかしこくまへら世を知ろしめす宮おましけり、守貞親王とぞ聞えける、高倉院第三の御子なり、隠岐の法皇（○後鳥羽天皇ヲイフ）の御このかみなれば、おほかたハやんごとなかりしかど、むかしの後白河の法皇安徳院の筑紫へおもむきしての後に、見奉らせ給ひける御むまごの宮たち選りの時、泣給ひしによりて位にはつかせ給はざりしかば、世の中うらめしきやうにて過ぐし給ふ云云法ひに御ぐしをさへおろし給ひてしのびの御おこなひみはかりをなるうちしたて

かのしろしめしつる世は、みな世の乱（○承久ノ乱ヲイフ）にかゝづらひて一院（○後鳥羽天皇）の御すぢハことごとくさすらへ給ひぬるのち、おのづからのこりとまりし宮たちも、世にさしはなたれてなりぬ、鎌倉君もおぼしまさるにより、あづま（○鎌倉ヲサシテイヘリ、時ニ鎌倉ノ執権ハ北条義時ナリ）よりのはからひにて、かの入道（○守貞親王ヲイフ）の御子（○後堀河天皇ヲイフ）の十におはしますを、承久三年七月九日にはかに位にすゑ奉る、父の宮をば太上天皇になし奉りて法皇と聞ゆ

○後花園天皇（崇光天皇之曽孫 貞成親王之子）

皇年代略記 後花園院諱彦仁（ヒコヒト）後小松院第二皇子実後崇光（スクワウ）（貞成親王）御子云云 正長元年七月廿八日践祚、無二立太子拜親王之儀一以二太上天皇（○後小松天皇ヲイフ）詔一作二宣命一（関白持基公為二摂政一）今日則被レ渡二剣璽一

椿葉記 宮御方（○彦仁親王ニシテ即後花園天皇ナリ）院（○後小松天皇ヲイフ）の御猶子

の儀なく踐祚あり、よろづ奢侈なかりしかば、淸盛十善ふかゝらせまゐらせ、めでたきよの不思議をみせ奉らんぜ侍るる

〇光格天皇　東山天皇之曾孫典仁親王之子

續皇年代略記　今上皇帝〇光格天皇ヲイフ御諱兼仁後桃園天皇子、實東山天皇御曾孫直仁親王御孫典仁親王御子也云云安永八年十一月八日爲二御養子一可レ有二踐祚一旨叡慮御治定、閑院太宰帥典仁親王第六男祐宮九才〇光格天皇ヲイフ同月廿五日踐祚

諸王ノ皇太子ト爲リ而レテ後皇位ヲ繼承セレ事

仲哀天皇　仁賢天皇　淳仁天皇　光仁天皇

〇仲哀天皇　景行天皇之孫日本武尊之子

仲哀天皇紀　首條　足仲彦（タラシナカツヒコノ）天皇〇成務天皇ヲイフ日本武（ヤマトタケルノ）尊第二子也云云稚足彦（ワカタラシヒコノ）天皇〇仲哀天皇ヲイフ四十八年立爲二太子一時年三十一

皇無レ男故立爲レ嗣、六十年天皇〇成務天皇ヲイフ崩云云

元年春正月庚子皇太子即二天皇位一〇仲哀天皇紀ニ成務天皇レドモ成務天皇ノ養テ子トセシニハ非ズ、唯皇位ヲ以テ天皇ニ傳ヘシノミ

〇仁賢天皇　履中天皇之孫市邊押磐皇子之子

仁賢天皇紀　首條　億計（オケノ）天皇〇仁賢天皇ヲイフ諱大脚（オホシ）字島郎（シマラヲコ）弘計（ヲケノ）天皇〇顯宗天皇ヲイフ同母兄也云云白髮（シラカノ）天皇〇清寧天皇ヲイフ元年冬十一月播磨國司山部連小楯（ヲダテ）請二京求一迎〇億計王弘計王ノ二王ノ播磨ニコフナリ白髮天皇尋遣二小楯一持レ節將二左右舍人一至二赤石一奉迎、三年夏四月遂立二億計天皇一爲二皇太子一云云

元年春正月乙酉皇太子〇仁賢天皇ヲイフ於二石上廣高宮一即二天皇位一

〇淳仁天皇　天武天皇之孫舍人親王之子

淳仁天皇紀　首條　廢帝〇淳仁天皇ヲイフ諱大炊（オホヒノ）王、天平勝寶八歲皇太子皇之孫一品舍人（トネリノ）親王之第七子也云云

道祖王諒闇之中心不在感、九歳三月廿九日辛丑高野天皇〇孝謙天皇ヲイフ皇太后與右大臣從二位藤原朝臣豊成云云等定策禁
中廢皇太子云云四月四日辛巳遂迎大炊王於仲麿田村家立
爲皇太子時年廿五、天平寶字二年八月庚子朔高野天皇禪位
於皇太子〇皇太子ハ大炊王ニシテ即チ淳仁天皇ナリ

〇光仁天皇施基皇子之子天智天皇之孫

光仁天皇紀首條寶龜元年八月四日癸巳高野天皇〇稱德天皇ヲイフ
崩、群臣受遺即日立諱〇光仁天皇ヲイフ爲皇太子、寶龜元年冬十月己
丑朔即天皇位於大極殿

諸王ノ皇子ト爲リ而シテ後皇位ヲ繼承セシ事

文武天皇ハ草壁皇子ノ子ナリ、後陽成天皇ハ誠
仁親王ノ子ナレバ、理共ニ諸王ニシテ後皇位ヲ
繼承セシニ似タリ、然レドモコレハ此皇嫡孫ニ
シテ顯宗天皇孝德天皇ノ例ト異ナリ、故ニ此ノ
條ニ載セズ

顯宗天皇　孝德天皇

〇顯宗天皇市邊押磐皇子之子履仲天皇之孫

顯宗天皇紀首條弘計天皇更名來目稚子顯宗天皇ヲイフ〇大兄去來穗別天
皇〇履仲天皇ヲイフ孫也、市邊押磐皇子子也云云三年ノ〇清寧天皇三年ナリ云
云夏四月立億計王爲皇太子、立天皇爲皇子云云
元年春正月己巳朔云云皇太子推讓云云制曰可、乃召公卿百
僚於近飛鳥八釣宮即天皇位〇顯宗天皇ハ仁賢天皇ノ弟ニシテ履中天皇ノ孫ナリ、清寧天
皇子無キヲ以テ二王子ヲ迎ヘ、兄王ヲ皇太子トシ弟王ヲ皇
子トス、皇太子位ヲ皇子ニ推讓スルニ及テ皇子皇位ヲ繼承
ス、是ヲ顯宗天皇トイフ、顯宗天皇崩ズ、兄皇太子即位ス、是ヲ
仁賢天皇トイフ、此ノ二天皇共ニ皇孫ニシテ皇位ヲ繼承ス
〇顯宗天皇紀ノ中清寧天皇ノ勅語ニ日ク朕無子也可以爲
嗣ノ文アリ、然レドモ清寧天皇ノ皇子ヲ養テ子トセシニ
ハ非ズ、唯皇子ト爲テ皇
位ヲ繼承セシメシノミ

○孝徳天皇　敏達天皇之曽孫茅渟王之子

孝徳天皇紀首條　天萬豊日（アメヨロツトヨヒノ）天皇○孝徳天皇（タカヒカシヒタラシヒメノ）天豊財重日足姫（アメトヨタカライカシヒタラシヒメ）天皇ヲイフ、天豊財重日足姫天皇ヲイフ同母弟也○皇極天皇ハ共ニ敏達天皇孝徳天皇ノ曽孫ニシテ茅渟王ノ子ナリ

○皇極天皇ノ四年ニシテナリ即六月庚戌天豊財重日足姫天皇云四年○皇極天皇ノ大化元年ナリ而詔曰云云○天智天皇ヲイフ、時ニ中大兄皇太子タリ（ナカノオホエノ）

姫天皇思欲傳位於中大兄（ナカノオホエ）ニ○中大兄ハ即チ天智天皇ヲイフ、時ニ中大兄皇太子タリ（フルヒトノオホエ）而詔曰云云古人大兄殿下之兄也中大兄退語於中臣鎌子連議曰古人大兄在而殿下陳天皇位便違人弟恭遜之心、且立舅以答民望不亦可也於是中大兄深嘉厥議竊以奏聞、天豊財重日足姫天皇授璽綬禪位、策曰咨爾輕皇子（カルノ）云輕皇子再三固辭云由是輕皇子不得固辭升壇即位

諸王ノ降テ臣下トナリ復昇テ親王ト為リ尋テ皇太子トナリテ皇位ヲ繼承セシ事

○宇多天皇

光孝天皇紀　仁和三年八月廿五日詔曰朕之諸児皆錫朝臣之姓、斯誠節國用息民勞之計也、今驚台列之昌言仰思桃祐之重業、天潢豈可朽枝、圖億兆之平安尋磐石於漢典、占寰宇之固鎮詠維城於周篇、匪劉匪姬竟為其選、第七子皇子定省（サダミ）年二十一、便侍朕躬未曾出閤寛仁孝愍朕所鍾愛前被混昆弟之雅行遠編戸、今欲傳祖宗之駿命何澁請任、苟不為身誰嫌及汗、其削臣姓以列親王、心星宜肖帝子之名、岳嵎曷亂天孫之胤、廿六日天皇聖體乘豫、是日立第七皇子諱○宇多天皇ヲイフ、天皇元慶中侍従ニ任ズ時人王侍従ト稱ス、元慶八年源姓ヲ賜フ、是ニ至テ親王ニ列レ遂ニ皇太子ト為ル為皇太子云　云是日巳二刻天皇崩於仁壽殿云云

扶桑略記巻廿二　宇多天皇云　仁和三年丁未八月廿六日践祚時年二十一

諸王ノ群臣ノ勸進ニ從テ皇位ヲ繼承セシ事

繼體天皇　舒明天皇　後堀河天皇　後花園天皇

○繼體天皇（應神天皇五世之孫彦主人王之子）

繼體天皇紀首條　男大迹（ヲホト）天皇更名彦太尊○繼體天皇ヲイフ　譽田（ホムダノ）天皇○應神天皇ヲイフ　五世孫彦主人（ヒコウシノ）王子也云云　八年○武烈天皇ヲイフ　崩云云　八年ナリ　冬十二月己亥小泊瀨（ヲハツセノ）天皇○武烈天皇ヲイフ　崩云云　元無男女可絶繼嗣天下何處繫心自古迄今禍由斯起云云

元年春正月甲子大伴金村大連更籌議曰男大迹王性慈仁孝順可承天緒、冀慇勤勸進紹隆帝業、物部麤鹿火（モノノベノアラカヒノ）大連許勢男人（コセノヲヒト）大臣等僉曰妙簡枝孫賢者唯男大迹王也、丙寅遣臣連等持節以備法駕奉迎三國○越前ノ央（ナカバ）ニ衛兵杖肅整容儀警蹕前驅奄然而至云云　甲申天皇行至樟葉（クスハノ）宮、二月甲午大伴金村大連乃跪上天子鏡劍璽符再拜、男大迹天皇謝曰子民治國重事也寡人不才不足以稱、願請廻慮擇賢者寡人不敢當、大伴大連伏地固請、男大迹天皇西向讓者再、大伴大連等皆曰臣伏計之大王○已下普通本錯亂ナリ古本ニ據テ文ヲ正ス子民治國最宜稱、臣等爲宗廟社稷計不敢忽、幸籍衆願乞垂聽納、男大迹天皇曰大臣大連將相諸臣咸推寡人寡人敢不承乘、乃受璽符是日即天皇位

○舒明天皇（敏達天皇之孫彦人大兄皇子之子）

舒明天皇紀　息長足日廣額（オキナガタラシヒヒロヌカノ）天皇○敏達天皇ヲイフ　孫彦人大兄（ヒコヒトノオホエノ）皇子之子也云云　豐御食炊屋姬（トヨミケカシキヤヒメノ）天皇○推古天皇ヲイフ　二十九年皇太子豐聰耳（トヨトミミノ）尊薨而未立皇太子、以三十六年三月天皇○推古天皇ヲイフ　崩、九月葬禮畢之嗣位未定、當此時蘇我蝦夷（エミシ）爲大臣獨欲定嗣位云云　○此ノ間ノコト委シクハ皇極紀ニ引ケリ合セ見ルベシ

元年春正月甲午大臣及羣卿共以天皇之璽印獻於田村皇子

○舒明天皇ヲイフ則辭之曰宗廟重事矣寡人不賢何敢當乎、羣臣伏固請曰大王先朝鍾愛幽顯屬心、宜纂二皇緒一光臨億兆、即日即二天皇位一○舒明天皇ハ敏達天皇ノ孫ニシテ押坂彦人大兄皇子ノ子ナリ

○後堀河天皇高倉天皇之孫守貞親王之子

皇胤紹運録 後堀河院諱茂仁（トヒト） 云 承久三年七月九日踐祚 十 依二天下擾亂一為二關東沙汰一有二立王及父王尊卑事一○父王ハ高倉天皇ノ御子守貞親王ニシテ後高倉天皇ト稱スル即是ナリ

梅松論上巻 淺鳥羽院世をみだり給ふ、隱岐國へ遷し奉りうつしまゐらする○北條義時ノ遷シ奉タテマツルナリ 當今（㊀）（㊁）（天）皇は孫淺堀河天皇を關東へとり申給ひつけまゐらせ、當一旦は申めづらの陳儀ともいへども、御孫の御ゆゑ御位をゆづらせ給ふ

○後花園天皇崇光天皇之曾孫貞成親王之子

皇胤紹運録 後花園天皇諱彦仁（ヒコヒト） 云 實後崇光○貞成親王ヲイフ親王

○崇光天皇ノ孫ナリ 第一皇子、稱光院崩御之後依二無皇胤一為二御猶子一○後小松天皇ノ御猶子ナリ 正長元年七月廿八日踐祚、先立二太子并立親王之儀一、以二太上天皇一○後小松天皇ヲイフ詔作二宣命一今日則被レ渡二劍璽一

椿葉記 去六月の頃より御惱ありしかども、さまでの御事共にはあらざりしかば、世の人の心も定まりぬ、七月廿七日俄に崩御なりぬと聞えしかば、御猶子の儀ありて、御位に即き給ひぬ、○稱光天皇ノ御惱ナリ 猶ほ御謀ありしかども、世を守り給ふ事、三寶院准后の御使ありて、富町殿○義教ヲイフ へ參りて、御位の事申入れしかば、御返事には、我は東山若王子へ入申さんと思ふ心ざしありつるを、世の中かくはだしくあるべしとは思ひよらざりつる事なれば、力及ばず、御位に即き給ふべし、と仰られしかば、豊朝臣伏見殿へ參りて、三寶院准后の御使ありて富町殿へ參りて、御位に即き給ふべしと仰られしかば、宮御方○彦仁王ヲイフ 日來へあしこもこもよ、まづ東山若王子へ入申さんと思ふ心ざしありつるを、世の中かくはだしくあるべしとは思ひよらざりつる事なれば、力及ばず、御位に即き給ふべしと仰られしかば、豊朝臣伏見殿へ參りて、三寶院准后の御使

上下の動揺めき奏うつるよかおそれ、免でたさゆやも
ある召ごりあるよ〳〵ちし〳〵、ふ
とりまこのみひ〳〵、御遊へを待不ど、十三日の夕方ある
愛領のまの若どもも四五百人参り由云四五日御逗留あり、
ふ〳〵内と若き子へ渡御あり由云
さて富町殿より幕府へ特基を以て事のま初を仙
洞（後小松天皇ヲイフ）へ申さる、汚ど四十七日仙洞へ入さる、
室町殿より御車番頭い〳〵条ら出さる、綾小路宰
相唐門三位御車の渡ふまある、長資朝臣隆富朝臣供奉
を菅領又子まある、御車の前後ま数百人警固ふ条ま
道をごら見物の人よ多く〳〵さら〳〵渡り
陰行未ま素陽も空ふあ〳〵を生ける、めで〳〵たさも思ひ
よるきいあ〳〵ばかり、まごのこまる人々ほあ〳〵しりゆ

とぞ関正〳〵、ゆるさ〳〵院（後小松天皇ヲイフ）の御所ま渡ら世給ふ、
さる条どふ内裏（稱光天皇ヲイフ）へ廿日前御幸あり（諡号稱光院）践
祚の事今いひしごと〳〵、栗田口の館穐ま定べ三條
前右府の亭を點じ〳〵名さ〳〵れ〳〵新内裏ふ遷ふ
修理せられ〳〵船参ど造〳〵へらるとぞきこえし、同
廿九日新内裏へ渡御ある、院の御好子北陽ま女御あ
り、よろづ奢規ふこのさ〳〵ど、御歳十歳ま条ど世申しかの
めでたさ世のふ四海ふ譽ふ天下の口遊ま〳〵ど作る

女王

女王ノ直ニ皇位ヲ繼承セル事

○皇極天皇紀首條　皇極天皇（敏達天皇之曾孫茅渟王之子　天豊財重日足姫（アメトヨタカライカシヒタラシヒメ）天皇ヲイフ）○皇極天皇中倉太珠敷（ナカクラフトタマシキ）天皇（敏達天皇ヲイフ）曾孫押坂彦人大兄（オサカノヒコヒトオホエ）皇子孫茅渟（チヌ）王女也云云

息長足日廣額天皇○舒明天皇ヲイフ二年立爲皇后、十三年十月息長足日廣額天皇崩

元年春正月辛巳皇后○皇極天皇ヲイフ即天皇位

水鏡中卷　次乃御門皇極天皇ト申ス、敏達天皇のひこおほきさきおほきさきの御女、舒明天皇ヲ生奉リ給ヒ、おほきさきの御女、舒明天皇ヲ生奉リ給ヒ、云々壬寅年正月十日位ヲつき給ふ

女王ノ皇后ニ立チ而シテ後皇位ヲ繼承セシ事

○皇極天皇

皇極天皇紀首條　天豐財重日足姫天皇○皇極天皇ヲイフ　敏達天皇○敏達天皇ヲイフ　曽孫押坂彦人大兄皇子孫茅渟王女也云々　息長足日廣額天皇○舒明天皇ヲイフ二年立爲皇后、十三年十月息長足日廣額天皇崩

元年春正月辛未皇后○皇極天皇ヲイフ即天皇位

幼主

皇太子幼クシテ皇位ヲ繼承セシ事

皇太子未ダ長ゼズシテ皇位ヲ繼承スルトキハ大臣萬機ヲ保輔ス、宜シク人臣攝政ノ條ト併セ見ルベシ

清和天皇　陽成天皇　醍醐天皇　朱雀天皇
一條天皇　後一條天皇　堀河天皇　鳥羽天皇
崇徳天皇　六條天皇　高倉天皇　安徳天皇
後鳥羽天皇　土御門天皇　仲恭天皇　四條天皇
後深草天皇　後宇多天皇　後伏見天皇　花園天皇
後村上天皇　崇光天皇　後小松天皇　東山天皇
中御門天皇　桃園天皇　後桃園天皇

○清和天皇踐祚　年九歳

太政大臣藤原良房攝政

文德天皇紀　天安二年八月乙卯帝〇文德天皇ヲイフ崩新政殿左近衛少將率近衛等陣於東宮〇清和天皇ノ居所ヲイフ直曹西方大納言安倍朝臣安仁率少納言近衛少將主鈴等令賚璽印櫃等奉入直曹云云〇清和天皇ノ皇位ヲ繼承セシナリ、天皇時ニ年九歳ナリ〇本書天安二年八月ノ條ニ良房攝政ノ事ヲ載セズ、公卿補任天安二年ノ條ニ良房攝政太政大臣、大鏡裏書ニ良房時為攝政トアリ、二書又貞觀七年清和天皇元服ノ條ニ良房攝政ヲ辭ス、八年重テ勅シテ天下ノ政ヲ攝行セシムトアリ、然ルヲ三代實錄貞觀八年八月廿九日太政大臣ニ勅シテ天下ノ政ヲ攝行セシムトノミアリテ、其ノ再タビ攝政ノ命アルヲ言ハザリシハ、天皇幼冲ニシテ即位シ良房外戚ノ大臣タルヲ以テ廢務ヲ攝行ストイヘドモ、未ダ攝政ノ名ハアラザリシナラン、其ノ後帝年稍長ジ元服ヲ加フルニ至テ、始テ更ニ攝政ノ勅ハ有シナラン、然レドモ良房廢務ヲ攝行セシコトハ、天安二年八月ヨリ以来ナルコト疑フベカラザルナリ、扶桑略記寛和二年六月、一條天皇踐祚シ右大臣藤原兼家攝政ノ條ニ、右大臣藤原朝臣萬機ヲ攝行スルコト忠仁公ノ故事ノ如シトアリ、忠仁公ハ即チ良房ナリ、譲位受禪ノ日良房攝政ノ故事ヲ引キ、帝王編年記巻十四清和天皇云云天安二年十一月七日甲子即位于大極殿時年九歳此日以太政大臣為攝政云云トアルモ亦徵トスルニ足ラン

〇陽成天皇踐祚　年九歳

右大臣藤原基經攝政

清和天皇紀　貞觀十八年十一月廿七日車駕〇清和天皇ヲイフ幸染殿院廿八日天皇有意讓位故出居外宮云云廿九日皇太子〇陽成天皇ヲイフ自出東宮駕牛車詣染殿院、是日天皇讓位於皇太子、勅右大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣基經、保輔幼主攝行天子之政如忠仁公故事〇陽成天皇時年九歳ナリ云云皇太子受天子神璽寶劍御鳳輦歸於東宮、文武百官扈從如常儀

〇醍醐天皇踐祚　年十三歳

東宮大夫藤原時平、春宮權大夫菅原道眞輔佐

日本紀略　寛平九年七月三日卯二刻於清涼殿加元服年十三〇醍醐天皇ノ元服ヲ加フルナリ午三刻太上皇〇宇多天皇ヲイフ讓天祚于紫宸殿〇宇多天皇皇位ヲ醍醐天皇ニ讓ルナリ傳國詔命云春宮大夫藤原朝臣〇時平ヲイフ權

大夫菅原朝臣○道真ヲイフ少主未レ長之間一日萬機之政可レ奉レ可レ請之事可レ宣可レ行云云

○朱雀天皇踐祚　年八歲

左大臣藤原忠平攝政

日本紀略　延長八年八月十三日太子○朱雀天皇ヲイフ與二中宮一○朱雀天皇ノ母穩子ヲイフ遷二御宣耀殿一云云九月廿二日壬午先帝○醍醐天皇ヲイフ逃レ位讓二皇太子一年八○朱雀天皇ノ踐祚ナリ左大臣藤原朝臣○忠平ヲイフ攝政内侍執二劒璽一參二宣耀殿一奉レ之

○一條天皇踐祚　年七歲

右大臣藤原兼家攝政

日本紀略　寛和二年六月廿三日花山天皇倫出二禁中一奉二劒璽一於新皇一年七○一條天皇ヲイフ外祖右大臣○兼家ヲイフ參入令下固二禁内一警備上、翌日行二先帝○花山天皇ヲイフ讓位之禮一ノ踐祚ナリ右大臣藤原朝臣攝行萬機一如二忠仁公○良房ヲイフ故事一

○後一條天皇踐祚　年九歲

左大臣藤道長攝政

日本紀略　長和五年正月廿九日甲戌未刻三條院天皇逃レ位讓二皇太子一○後一條天皇ヲイフ于レ時皇太子春秋九歲、于レ時御二坐上東門院一、令下新帝○後一條天皇ヲイフ外祖左大臣藤原道長朝臣攝中行政事上如二忠仁公○良房ヲイフ故事一

○堀河天皇踐祚　年八歲

關白藤原師實攝政

扶桑略記卷三十　應德三年丙寅十一月廿六日亥時踐祚八歲○堀河天皇ノ踐祚ナリ當日辰時親王從二車駕一從二關白一位藤原朝臣師實ヲイフ大炊、爭二御堀川院一、即關白被二候御車後一、大納言以下公卿皆悉前駈、但内大臣藤原朝臣師通騎馬仕二於後陣一、左右大臣依二重

服不レ被二供奉一、亥時神璽寶劔受取、其儀式自二三條院西門一至二堀川新内裏東門一、掃部司敷二庭道於大路一、先帝○白河天皇ヲイフ藏人頭左近中將源雅俊右近權中將藤仲實二人持二神璽寶劔一歩行、關白從一位藤原朝臣師實内大臣藤原朝臣師通并大納言以下公卿近衛司等皆悉供奉、即夜有下太子授位宣命關白改爲二萬機攝政一詔上

○鳥羽天皇踐祚　年五歳

關白右大臣藤原忠實攝政

中右記　嘉承二年七月十九日云

但レ事故アル者ハ本文ヲ擧グ

百練鈔　嘉承二年七月十九日云

○崇徳天皇踐祚　年五歳

關白左大臣藤原忠通攝政

百練鈔　保安四年正月廿八日云

公卿補任　保安四年正月廿八日云

○六條天皇踐祚　年二歳

關白藤原基實攝政

百練鈔　永萬元年六月廿五日云

公卿補任　永萬元年六月廿五日云

○高倉天皇踐祚　年八歳

藤原基房攝政

百練鈔　仁安三年二月十九日云

公卿補任　仁安三年二月十九日云

○安徳天皇踐祚　年三歳

關白内大臣藤原基通攝政

玉海　治承四年二月廿一日云

○以下引書ノ名ノミヲ擧ゲテ其ノ本文ヲ省ク

公卿補任　治承四年二月廿一日云云

後鳥羽天皇踐祚

藤原基通攝政

年四歲

玉海　壽永二年八月廿日壬子天晴、此日有立皇事（高倉院第四宮御年四歲、母故正三位修理大夫□隆卿女）兼日頻有其沙汰、先以高倉院兩宮（三宮四宮）被卜筮（立第一宮之處、官寮共申一吉（三宮吉ナリ之由、其後女房ト筮ニ立第三宮可立給之由也（細見先日記四宮可立給之由也）又義仲引級坐加賀國之宮（子細見上）如有夢想事、今度以四宮立一加云云）又卜申一吉之由（四宮吉ナリトイフナリ四宮ハ即後鳥羽天皇ナリ）第二半吉第三不快云云以卜形遣義仲此之間更又有御卜（賀宮立第三云云）第之立樣甚以不當也、依御歲次第者以之處大忩怨申云、先次第加賀宮可立第一也、不然者又如初可被爲先兄宮事体似矯飾、不思食知故三條宮至孝之條太以遺恨云云然而一昨日重遣御使（僧正俊堯林曾之定使也）數遍往還懇申可在御定之由仍其後一決云云（左大臣）

云今日之事依爲新儀左大臣造進次第、就彼趣被行云云（左大臣）○（藤原經宗ナリ）于時御名字定云云定趣、左大臣皇后宮大夫左大辨等申尊成（タカヒラ）可被用之由云云次有傳國宣命奏下事云云不得劍璽踐祚之例希代之珍事也云云踐祚、次第左大臣造（○藤原經宗ヲイフ）經宗踐祚ノ次第ヲ造リシナリ）早旦於院職事召陰陽師令勘踐祚日時（於宜歟）可歟）曲刻限攝政（○藤原基通ヲイフ）以下被參院（無文帶蔣繪劍）大臣以下着殿上次職事下踐祚日時於大臣仰之、今日可有踐祚事者、次大臣召大外記給日時、仰云今日可有踐祚事諸司仍（オホセ）召仰與次職事奉院宣可令傳國宣命之由仰大臣、此間職事又奉院宣頭藏人昇殿、人人交名獻攝政、次大臣召大內記仰宣命事、可載太上法皇詔旨之旨可仰下之、又攝政事可載之、先帝不憲脫屣事同可載歟次內記進宣命草入笥云云

增鏡卷一（おどろのもと）

て渡らせ給ひぬるにより、御位を讓り給ひ、高倉院第四の御子にて云云壽永二年八月廿日御年二歳にて位に即き給ひつゝ廿五年の世を治め給ひ、内侍所神璽寶劍の讓位の時、未だ渡り給はざるまゝ、先帝の御位に在ますけれども、三種の神器なくして、めづらしき例なり。

神皇正統記下巻　第八十二代第四十四世後鳥羽院諱尊成、高倉第四の子云云先帝（○安徳天皇ヲイフ）西海に臨幸ありしかば、（○御存在ニテ坐シカバトイフ）祖父法皇（○後白河天皇ヲイフ）都にかへりて攝政泰通の大臣と平氏の編まゝに供奉せられしを、いさめやりてぞ有けるやがて九條の大臣を攝政とせんとの給ひしかども、なほ我が親族なるべきよしにて、人々の御位ざまなどをぞ定められける。

院宣（○後白河天皇ノ宣旨ヲ書ク）

十月廿日　左中將泰通朝臣

仰下す、三種の神器、依て太上法皇の詔を奉り、新主に傳へ奉るべきの由、攝政以下群臣僉議の上、奏聞し畢んぬ。宜しく承知して、其の旨を得べし。

院宣（○後白河天皇ノ宣旨ヲ書ク）

十月廿日　左中將泰通朝臣

仰下す、三種の神器、依て太上法皇の詔を奉り、新主に傳へ奉るべきの由、攝政以下群臣僉議の上、奏聞し畢んぬ。宜しく承知して、其の旨を得べし。

○元暦元年七月廿八日即位（○後鳥羽天皇ヲイフ）

即位の儀あり、聖年甲辰にあたる年四月廿日、此間犯土の事ありしかば、法皇此君をえらび定め申給けるとぞ。先帝三種の神器をおひぐせ奉らせ給ひしかども、猶北陸道の御旅にましまして、皇太神宮の本宮、一院の位を傳へ給ふべき天位つゝがなくましますべき事、平氏ほろびて後内侍所神璽は歸り入らせ給ひぬ。寶劍は海に沈みて、つひに海より出でず。おひ奉らせ給ひしかども、神宮の御告ありて、神劍を奉らせ給はざりしが、神宮の御告ありて、近江までの御旅にて

公卿補任　壽永二年云　攝政從一位藤原基通廿四歲、四月十七日上表辭內舍人隨身、八月廿日太上皇詔爲攝政、十一月廿一日停攝政

〇土御門天皇踐祚　年四歲

關白藤原基通攝政

明月記　建久九年正月十一日云

公卿補任　建久九年正月十一日云

〇仲恭天皇踐祚　年四歲

左大臣藤原道家攝政

百練鈔　承久三年四月廿日云

公卿補任　承久三年四月廿日云

〇四條天皇踐祚　年二歲

關白左大臣藤原教實攝政

百練鈔　貞永元年十月四日云

公卿補任　貞永元年十月四日云

〇後深草天皇踐祚　年四歲

關白左大臣藤原實經攝政

百練鈔　寬元四年正月廿九日云

公卿補任　寬元四年正月廿九日云

〇後守多天皇踐祚　年八歲

關白藤原忠家攝政

一代要記　文永十一年正月廿六日云

公卿補任　文永十一年正月廿六日云

〇後伏見天皇踐祚　年十一歲

關白藤原兼忠攝政

一代要記　永仁六年七月廿二日云

公卿補任　永仁六年七月廿二日云云

○花園天皇踐祚　年十二歲

關白藤原師教攝政

園大曆　德治三年八月廿六日云云

公卿補任　德治三年八月廿六日云云

○後村上天皇踐祚　年十二歲

○

太平記卷廿一　延元三年（○延元三年ハ誤ナリ四年トスヘシ）八月九日ヨリ吉野、主上（○後醍醐天皇ヲイフ）御不豫、事有ケルガ云云八月十六日丑刻ニ遂ニ崩御成ニケリ云云新主（○後村上天皇ヲイフ）幼主ニテ御坐アル上、君崩ジタル後百官冢宰ニ任セ三年政ヲ聞召レヌ事ナレバ、萬機悉ク北畠大納言計トシテ（○是ノ時ニ當テ親房卿常陸ニ在リ萬機ヲ攝行セシハ若シ關白經忠公ナルカ次ノ條見ルベシ）洞院左衛門佐實世四條中納言隆資卿二人專諸事ヲ被ニ執奏一

南方紀傳上卷　南朝延元四年（○卯）北朝曆應二年ヨリ當ル云云）於八月九日南帝陽不豫、同十四日義良親王（御年十二○後村上天皇ヲイフ）踐祚、左大臣經忠公の子ホ迂生、三種ノ神器ヲ授ケ奉ル云云南朝ヨリ經忠公ノ子ホ迂生ヲ以テ北朝ニ入レ奉ル事ホ但ゼ、資任ロ卿ノ事ナリ、洞院實世四條隆資傳奏タリ

○崇光天皇踐祚　年十五歲

○

皇代曆下卷　崇光院（スガノ）云云貞和四年十月廿七日踐祚十五云云

關白左大臣良基踐祚、日關白如レ元（○崇光天皇幼ナリト雖ヘドモ攝政ヲ置レズ）公卿補任　貞和四年十月廿七日云云

○後小松天皇踐祚　年六歲

前太政大臣藤原良基攝政

皇代曆下卷　永德二年四月十一日云云
公卿補任　永德二年四月十一日云云
○東山天皇踐祚　年十三歲
關白藤原冬經攝政
野史卷十四　貞享四年三月廿一日云云
編年攝關雜錄　貞享四年三月廿一日云云
○中御門天皇踐祚　年九歲
關白藤原家凞攝政
野史卷十五　寶永六年六月廿一日云云
○桃園天皇踐祚　年七歲
關白左大臣藤原道香攝政
野史卷十七　延享四年五月二日云云
○後桃園天皇踐祚　年十三歲

前關白藤原內前攝政
野史卷十九　明和七年十一月廿四日云云
皇太弟幼クシテ皇位ヲ繼承セシ事
圓融天皇　近衛天皇　順德天皇　龜山天皇
○圓融天皇踐祚　年十一歲
太政大臣藤原實賴攝政
日本紀略　安和二年八月十三日冷泉院天皇逃レ位讓二於天皇一
○圓融天皇ヲイフ時ニ天皇皇太弟タリ　于レ時新帝年十一新主於二襲芳舍一受禪、詔令下太政大臣藤原朝臣○實賴ヲイフ輔二佐幼主一攝行政事、如二上文一負信公○忠平ヲイフ故事、又立二先帝○冷泉天皇ヲイフ第一皇子師貞親王一爲二皇太子一年二在一條第一其時令レ賚二劍璽一於內侍一參二凝華舍一ノ○圓融天皇ノ踐祚ナリ先帝遷二御弘徽殿一天皇上レ表謝レ之不レ許云云十六日先皇出二御冷泉院一
○近衛天皇踐祚　年三歲

關白藤原忠通攝政

百練鈔　近衛天皇云云永治元年十二月七日受禪、以二關白忠通一爲二攝政一、同廿七日即位、三歳

○順徳天皇踐祚　年十四歳

○

皇年代略記　順徳院諱守成云云正治二年四月十五日立太弟四

百練鈔　佐渡院○順徳天云云承元四年十一月廿五日受禪、皇ヲイフ云云

同日以二攝政家一爲二關白一○順徳天皇幼クシテ皇位ヲ繼承ス、而ノ條見ルベシ攝政ヲ置レズ、委レクハ人臣攝政

○龜山天皇踐祚　年十一歳

○

皇年代略記　龜山院諱恒仁云云正嘉二年戊午八月七日立二皇

太弟十云云正元元年己未十一月廿六日受禪、十一○毘沙門堂所藏記龜山院云云新主○龜山天皇出二御畫御坐一關白候二簀子一被奉如レ元之由トアルヲ見レバ攝政ヲ置レザリシナリ、皇代曆モ亦此ノ如シ

踐祚部類鈔　龜山院正元元年十一月廿六日甲午受禪、新主冷泉冨小路殿十七日遷御日來内裏也舊主冷泉万里小路殿十五日自二冷泉冨小路一第遷云云上卿云云内辨云云宣命使叙璽使云云申刻左大臣參二陣頭一宮内卿仰下日時、次固關召二仰三關使一、次警固召二仰六府一、新主出二御晝御坐一關白候二簀子一被奉如レ元之由、次召二藤原朝臣賴憲一被二仰藏人一、事次又召同人勅授已下事、次關白已下拜舞、勅授弁殿混合一度拜也、兩貫首以下於二殿上口一拜、吉書事畢權大納言着二陣關白如レ元之由被二仰一外記一云云

日嗣皇子幼クシテ皇位ヲ繼承セシ事

皇太子幼クシテ皇位ヲ繼承スルノ條ト合觀スベシ

〇應神天皇踐祚　年一歲
皇太后氣長足姬尊攝政
仲哀天皇紀　八年九月己卯詔群臣以議討熊襲時有神託皇后〇神功皇后ヲイフ而誨曰天皇何憂熊襲之不服是膂之空國也豈足擧兵伐乎愈玆國而有寶國譬如美女之睩有向津國云是謂拷衾新羅國焉云時神亦託皇后曰云我所見國何謂無國以誹謗我言其汝王之如此言而遂不信者汝不得其國唯今皇后始之有胎其子〇應神天皇ヲイフ有獲焉然天皇猶不信以強擊熊襲不得勝而還之
九年春二月丁未天皇忽有痛身而明日崩〇仲哀天皇崩ズ而皇位ヲ繼承スル者ハ應神天皇ナリ、時ニ天皇未タ皇后ノ胎中ニ在リ、天皇胎中ニ在テ皇位ヲ繼承ス、繼體天皇紀六年十二月ノ條ニ曰ク、夫住吉神初以海表金銀之國高麗百濟新羅任那授記胎中譽田天皇云云宜化天皇紀元年五月ノ條ニ曰ク、自胎中之帝洎于朕身云云ト見ユ、應神天皇ハ胎中ニアリテ皇位ヲ繼承セシ天皇ナルヲ以テ、上古ヨリ斯ノ如ク稱セレナリ

神功皇后紀　首條　爰伐新羅之明年春二月皇后領群卿及百寮移于穴門豊浦宮即收天皇之喪從海路向京　云　冬十月癸亥朔甲子群臣尊皇后曰皇太后是年也大歳辛巳即爲攝政元年
應神天皇紀　首條　譽田天皇〇應神天皇ヲイフ　云　天皇以下皇后討新羅之年歳次庚辰冬十二月生於筑紫之蚊田　云　皇太后攝政之三年立爲皇太子時年云云三年ニ立テ皇太子ト爲ルト雖ドモ然レドモ皇位ヲ繼承セレ委レクハ日嗣皇子皇位ヲ繼承スルノ條ニイヘルガ如
神皇正統記上卷　第十五代神功皇后ハ息長宿禰の女開化天皇四世の御孫なり、息長足姫尊と申、仲哀天皇の后と也、仲哀神の教まもらずして世を早くし給ひしかば、皇后は身ごもりまします七日ありてお腹を痛ませ給ひて、神かゝりまします云云、神を喪へ給ふ云云うつくしく新羅百濟高

龜をうちしたゝき云云筮竹を採り考へ云云筮竹天皇みづから採らせ給ふ次、神の中臣ひきよせ給ふ次、神の中臣ひきよせ給ふ次、皇后摂政して辛巳の年是を胎中天皇と申奉る次、皇后摂政して辛巳の年より天下をおさめ給ふ

皇子幼クシテ皇位ヲ繼承セシ事

皇太子幼クシテ皇位ヲ繼承スルノ條ト合觀スベシ

後光嚴天皇　後圓融天皇　稱光天皇　後光明天皇

靈元天皇

○後光嚴天皇踐祚　年十五歳

皇年代略記　後光嚴院諱彌仁（ヤヒト）云云曆應元年戊寅三月二日誕生、觀應三年壬子八月十七日踐祚（十五）未立親王（四）不立坊、今日先立（ツ）

親王、當日自持明院殿渡土御門殿（カズ、前左大臣藤原良基萬機ヲ關白ス）○後光嚴天皇十五歳ニシテ踐祚ス、而シテ攝政ヲ置

○後圓融天皇踐祚　年十四歳

皇年代略記　後圓融院諱緒仁（ヲヒト）云云延文三年戊戌十二月十三日誕生云云應安四年辛亥三月十五日著袴（四）同廿一日立親王（云云）同廿三日父帝（後光嚴）先（ツ）退本宮幸忠光卿室町（号柳原）亭、被行親王冠禮并讓國之儀、同日親王遷御土御門殿（レテ攝政ヲ置カズ、左大臣藤原師良萬機ヲ關白ス）○後圓融天皇十四歳ニシテ踐祚ス、而シテ

○稱光天皇踐祚　年十二歳

皇年代略記　稱光院諱躬仁（ヒト）云云應永八年辛巳三月廿九日誕生、同十八年十一月廿五日立親王（十一）同廿八日於清涼殿御元

服　云　同十九年八月廿九日受禪十二〇稱光天皇十二歳ニ
置カズ、前左大臣藤原
經嗣萬機ヲ關白ス　シテ踐祚ス而シテ攝政ヲ

年十一歳

○後光明天皇踐祚

前左大臣藤原康道攝政

野史卷十一　後光明天皇諱紹仁（ツグヒト）云　寛永十年三月十二日
生稱二素鵝（スガ）宮一、十九年十一月爲二親王一、二十年九月冠、十月三日徙
自二仙院一入二内裏一踐祚、攝政康道云云並如レ故、
公卿補任　寛永廿年十月三日云云

年十歳

○靈元天皇踐祚　攝政

關白藤原光平攝政

野史卷十三　靈元天皇諱識仁（サトヒト）云云承應三年五月廿五日生、
稱二高貴（アテ）宮一、明曆四年正月爲二親王一、叙二二品一、寛文二年十二月冠二於
前右大臣藤原教輔第一、三年正月徙二于新内裏一、二十六日受レ禪以レ

關白光平攝政

公卿補任　寛文三年正月廿六日云云

皇女幼クシテ皇位ヲ繼承セシ事

皇太子幼クシテ皇位ヲ繼承スルノ條ト合觀スベシ

年七歳

○明正天皇踐祚

關白左大臣藤原兼遐攝政

野史卷十　明正天皇諱興子（オキコ）云云元和九年十二月十九日生、
稱二女一宮一、寛永六年十月爲二内親王一、十一月八日踐祚云云以二關
白左大臣兼遐一攝政

公卿補任　寛永六年十一月八日云

十三朝紀聞卷一　寛永六年十月帝〇後水尾天皇ヲイフ令レ傳二皆於幕
府一曰遜レ位以二二女一繼レ之、大將軍〇家光ヲイフ大驚謂自二遷都一已來久無

女主、至レ今女宮踐レ極後世曰外戚之所レ為也諫レ之不レ聽、二十九日以二皇女與子一為二内親王一云十一月八日帝讓レ位於與子内親王一詔二関白兼遐一攝政

諸王幼クシテ皇位ヲ繼承セシ事

皇太子幼クシテ皇位ヲ繼承スルノ條ト合觀スベシ

後堀河天皇　後花園天皇　光格天皇

○後堀河天皇踐祚　年十歳

前左大臣藤原家實攝政

皇代暦下巻　後堀河天皇云　建暦二年月日誕生、承久三年七月九日踐祚云　○十一歳ハ十歳ノ誤ナリ　前左大臣家實攝政

皇年代略記　後堀河院諱茂仁云　建暦二壬申三月十八日誕生、承久三年辛丑七月九日踐祚十一依二天下擾亂一為二關東沙汰一有二立王及法皇尊號事一、自二持明院殿一入二御閑院一

○後花園天皇踐祚　年十歳

関白藤原持基攝政

皇年代略記　後花園院諱彦仁後小松院第二皇子、實後崇光貞成親王御子云　正長元年七月廿八日踐祚云　無二立太子拝親王之儀一、以二太上天皇一○後小松天皇ヲイフ　詔作二宣命一、関白持基公為二攝政一、今日則被レ渡二劔璽一

椿葉記　宮帰方　○彦仁王云　院○後小松天皇ヲイフ　の御猶子の儀もく踐祚あり、よろづ悉皆をさめとりて、沙汰申ほどまでは、めぐたさも世のつねの思ひ遠慮なるべし、天下のおもはくなどを作る　○後花園天皇ハ崇光天皇ノ曽孫ニシテ貞成親王ノ子ナリ、後小松天皇ヨリ皇位ヲ繼承セシム、而シテ立親王ノ儀ナシ、故ヲ以テ此ノ條ニ載ス

○光格天皇踐祚　年九歲

關白藤原尚實攝政

野史卷廿　光格天皇諱兼仁（トモヒト）、東山帝曾孫太宰帥典仁親王第六子也　云云明和八年三月十五日生于閑院殿、稱祐宮　云云安永八年十一月後桃園帝大漸、儲位未定、或將有矯命呼擁立、迄崩關白尚實奉遺詔迎天皇、二十五日天皇踐祚、以關白尚實攝政

皇統御譜　光格天皇　云云安永八年十一月八日御參內、同夜天皇○後桃園天皇ヲイフ御不豫被爲及御大切、無御繼體、帥宮息祐宮九歲爲御養子可有踐祚之旨叡慮御治定、御養母准后維子御方被仰出、勅使鷹司左大臣輔平公御參向于閑院殿、同日儲君宣下、同月廿五日御踐祚、同日御改諱兼仁、同年十二月十二日渡御于倚廬着御錫紵○光格天皇ハ東山天皇ノ曾孫ナリ、而シテ後桃園天皇ノ御養子ト為テ以テ皇位ヲ繼承ス、而シテ立親王ノ儀ナシ、故ヲ以テ此ノ條ニ載ス○因フ云諸王或ハ天皇ノ猶子ト為ル、諸王天皇ノ猶子ト為リ或ハ天皇ノ養子ト為リ養子ト為ルニ及テハ即チ父子ナリ、又天皇ナレバ子ハ當ニ皇子ト稱スベシ、而シテ此ノ書猶諸王ト稱スルハ、其ノ昭穆ヲ明瞭ナラシムル要ス、委シクハ人民身上篇ヲ見ルベシ

皇位繼承篇卷之四 終